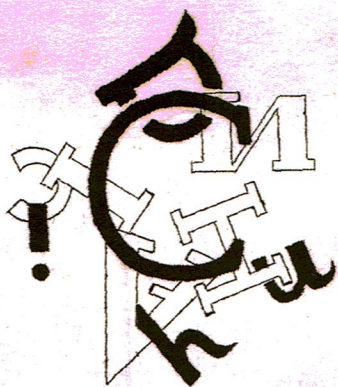


# CHAIN



No.7 '61 6

纖維化学科機関誌

# CHAIN 目次

六七号

「君、オノの創造者となれ」 —— 学長会見記 ——			1
詩 仙 堂	4回	富岡 享	5
北海道紀行 (中)		相宅 省吾	6
メーター・フェスティバル		窪田 幸代	9
「もっと何かをしょうじゅありませんか」	2回	植本 勲	11
ある一回生の入学感	1回	鈴木 紋次	12
所 感	1回	井上 隆之	13
「我々は決して無気力ではない」	4回	真多 勇夫	15
人さまごま	3回	大野 徹	17
神話と伝説の町を訪ねて	4回	川端 宗成	18
映画をみて	1回	向井 佐保子	21
或る憶い出	3回	分部 好寿	22
Adieu	2回	金井 政洋	23
アメリカ硬り	—	内野 規人	24
カンジをなくそう	4回	イチムラ	
		アキラ	25

「玄不可折」 .....	4回	浜村 尿次	30
磯閑誌の存在意義 .....	4回	毛瀬 治夫	31
新入生諸君へ .....	4回	荒谷 善夫	32
「落書き」 .....	4回	海野 悟	35
眠れないまゝに .....	2回	堀江 友	37
最後の手紙 .....	4回	宮内 博一	42
車中思 .....	5回	喜多 敏夫	44
「急げ者」 .....	2回	川嶋 淳夫	48
八ヶ岳早春 .....	4回	竹田 敬司	50
自然と人生 .....	1回	加原 敏功	54
「いのちあふるゝころともなれば」 .....	2回	かない まさひろ	56
ポリアロピレン紹介 .....	4回	早川 和彦	57
Carothers の論文集から (Ⅲ)			
— クロロプレンの周辺 — .....	4回	吉井 詢二	65
研究室紹介 .....			75
編集後記 .....			85

# 『君、才二の創造者となれ』

## — 学長会見記 —

我々 Chain の編集員は、七号を迎えた Chain を意義あるものにするために又 lucky-seven 号として紙面を飾るために、学長に色々お話を伺おうと、雨の中を本学本部へおもむいたわけである。本部の秘書に学長室へと案内された。六メートル四方くらいか少しうす暗い部屋の中奥あたりで、我々六人は学長に色々と同った。

学長は「Chain」については既に「Chain」の前身である「あたご」までも御存知で一号から六号まで目を通しておられるとのことでした。学長はもの静かな方で、我々の質問一つ一つに快よく、ていねいに答えて下さったり、説明して下さいました。

最初はず学長のお好きな野球の話から始まりました。

高校野球、夏の大会は創立から、春の大会は戦後からお世話をしておられるそうです。野球祭としての春の選抜大会、選手権大会としての夏の甲子園大会。シーズンの終りを飾る国民大会と各大会の説明をされ、色々なエピソードを混えながら、野球の話はまじまじ終りそうにありませんでした。何しろ大正四年からお世話をされておられるそうで、野球についてなら何時間でもお話しされそうです。

次に、科学技術の現状と将来について、学長は

科学が専門（応用化学が御専門）だから多少話は出来ると思うと前向きされて、次の様に語って下さった。

今日の化学工業を考える場合、化学は常にすべての産業と関係をもっている、即ち化学工業は電気磁気は勿論の事、農業にいたる迄あらゆる産業に関係している。従って、化学の現状を考えるには、すべての産業との関係及びその産業の歴史から考えねばならない。国全体が科学に目ざめたのは、明治の文明開化からとしても百年そこそこあるから、他国に比べればまじまじであると云える。その中でも化学は他の産業に比べ戦前まで一番遅れていた産業の一つであった。それは化学工業が独自で進もうと思っていたのが間違いであり、すべての産業と力を集結して伸

張しなかったのが、遅れた最も大きな原因だった。といっても明治時代の技術の吸収は早く、物理に化学にすぐれた学者が輩出したのではあるが、それは一部のものであり、一個の産業として、大成するにはまだまだ日時が必要であった。化学産業が伸張しだしたのは明治の末から第一次世界大戦にかけてであり、特に日露戦争より伸びだした。幸いと言うか、十年に一度の戦争で、国力が充実するにつれて、化学産業も伸張し、第一次世界大戦中は輸入がとだえ、国内で研究生産する必要にせまられ発展したからだ。なる程日本史を知る者には、あらゆる産業の発展が各戦争にいかに関係してきたかを考えるとうなずけることだ。

ともかく、何よりも大切な事は他の産業と手を組んで発展することであり、各自が独立で発展する事はとうてい不可能であり、間違っている方法なのだ。その点外国は各産業分野技術の交換あるいは連絡が非常によいと言える。又学長は日本人の頭脳が他民族に比べ劣ってはいず、むしろすぐれていることを強調された。

戦後機械工業は不振で、それでやたらに技術輸入をした。それを本当に我々のものにするには五～六年を要するのであり、十五・六年たった現状だいがのびてきたとおっしゃった。そういうことからして、機械工業の背景又経験により、化学界の発展はこれからぞと思つても言われた。

教わったものを自分のものにして、即ち日本流のものとして利用する即ちオニの創造者、オニの発明者の意味において、どしどし技術を輸入すればよいのであって、ともすれば物まね日本人と言われる我々であるが、単なる物まねや模倣に終るのではなく、そこで日本人の頭の良さを発揮して、一層良きものを作りだすべきである。又近隣国には技術の進歩した国はないのであるから、金もろけは別として、輸入した技術を改良し自国のものとしてどしどし技術出資をすべきである。

### オ三 番目に本学のことについて質問したところ

本大学は形においては、ちっほけなものだが、大学はただ大きいだけが能ではない。本大学はその名称の様に全国にも例のないユニークな大学としてありたい。それには我々学生の気分の持た方を強調された。

幸いに、先輩諸兄のお陰で、物事に真剣に取り組むことが本学の伝統の一つになっているのだそうだ。

又思想面として、学長は赤でも白でもいいけれど、それ等の運動は決してやらぬ様要望せられた。ただどの思想が良いのかという判断力を養うべきで、無条件に盲目的に従うことは一番悪いと強調された。

いずれにせよ、優れた健康な判断力を養うことが必要であり、この面でも本学の伝統とも言われた。

そして人固一人路一が出来ていなければ頭がよくてもだめであり、オ一に健康、オ二に人路、学問はその上に組み立てるべきであると述べられた。

オ四として今の教育制度について。

今の制度は初まってまだ十年であるから、その良し悪しはまだ判らない。学長の学生時代は技術の消化よりも吸収に忙がしい時代であった。

今はそうではなく、むしろ消化して自分のものにし、そして研究すべき時である。そういう点から明治時代の大学においては外国におくれまいと技術の輸入本位であったが、今は放養が必要であると言われた。

それならば本大学の様に他の総合大学と違い技術本位の学生ばかりのところではもっと放養科目の充実が必要ではないだろうか？

学長はこの問題に対しては、出来る限り多くの人と交際し、前に述べた様にしっかりした判断を養うよう努めてほしいと答えられた。

ところで、今春エヌ学部の新設された生産機械学科については、

単なる機械工学部と異なり繊維に關する機械あるいは、プラスチック等我々の繊維化学科とも大いに關係のある機械学科であり、

機械を造るための機械学科ではないのだ。つまり生産に必要な機械、生産と結びついた機械、即ち、産業に連絡する機械を研究する学科なのであるそうだ。

しからは養蚕科はこのままで良いのであろうか。

他学科が大いに生産に結ばれるのに比べ、蚕の研究とは不釣合いではなからうか。十数年前までの絹全盛時代は今や終ろうとしているではないか。

日本のそして京都の絹。あの西陣を中心とする絹織物も日々に進歩する化学の力に圧倒されているのが現状ではないか。今春新設された生産機械学科と養蚕科を比べて、何か矛盾を感じるのである。

この問題に対して学長はていぬいにこう語って下さった。

なる程このままではまずいと思うので、この際行き方を検討する必要がある。具体的には現任旧制の三繊維専門(東京農工大・信州大・本学)で協議しておられるそうだ。そして又こうも言われた。

なる程、今日養蚕は明らかに下火ではあっても、蚕の研究をしているのは日本だけである。仮に日本で研究するところがないとすれば、何処の國で研究するのか、研究する学生が居なくとも研究所の如き所で研究出

来るし、今後の養蚕科は大いに化学を取り入れて養蚕化学の名のもとに研究すべきである。そうすれば、ここにも本学がユニークな存在として特徴づけられることになる……と。

更に当然あって然るべきであるのに専門の教授の居られない講座や全然ない講座についても親切に説明して下さった。

勿論、新しく講座を設ける時には文部省に申請し、その許可が必要である。大蔵省にもそう金が余っている訳ではないので、新設するには非常な努力を要する。いずれにせよ、今世の中は我々学生に何を望んでいるのかを知り、その期待にそうよう努めてほしいと言われた。

本部へおもむいたのが一時半頃だったので、もうそろそろおいとまを乞う時刻となった頃話題は再び野球になっていた。学長の若き三高時代の野球話、対一高戦、遠征試合等をなつかしそうに話された。その後、今日のお土産話と称されて、学長室に飾られている Becker 画伯の裸婦についてあるいは又浅井忠画家の馬の絵、そして教と学長の御尊父との関係など興味あるお話をして下さいました。

天年 60 才になられるとはどうしても思われない程、活気に満ちておられるのはやはり青少年時代の野球の為だろうかと思いました。

趣味は野球は別として将棋(三段……田結ある三段だがこれは又の機会に書こうと思う)と学生教育だと語られる学長と会見し終わったのが、四時に二三分前でした。



#### —— 学長と会見して ——

我々六人は厳肅な面持ちで、学長室へ入って行った。一つのテーブルを囲んで話をし始めるや、タバコをたて続けに 4.5 本喫われたところをみて、大変親密感が湧いた。そして話が進むにつれて、初めの懸念が全く杞憂であったことが分かり、気持ちがよかった。そのためか初めの予定 30 分を超過すること実に一時間。学生の教育が趣味だとおっしゃる学長。しかも、学長自身若い学生と話し合うのが好きだと言われる様に我々は本当に愉快な一時を過ごさせて頂いた。

最後にこの会見の実現のために、お忙しい中に、色々とお手数をおかけした稲宅助教授に紙上をもって、厚くお礼申し上げます。

# 詩仙堂

## 4 回生 富岡 享

向近かに比叡を仰ぎつつ、坂を登り行きいよいよ山近。走る石手、生煙の宮に詩仙堂の戸口を見出す。詩趣に耽り、煎茶を煎んだ石川丈山作庭の、隠庵の地は、書院の南東に附け、南面には、はるか京の町並を望み、あたたか、雲上の窓を鑑さす。本庭は東に瀧を落し、その水を詩仙の向の前に導き流れに添うて、サツメ刈込を削い、あけ開けられた座敷の前一面の白砂が大海の景趣を作る。全体的には袖山水の形式をとっている。又一時折寂莫を破る下部の僧都の音は寂しい孤独の世界を味わせる。この趣、殊のほか、この境地にかさわしいものである。

では一口に言って、この庭の特色は何であろうか。それは自由放逸な個性が生かされている事であろう。あまた多くの庭に、名庭と称される庭にさえ個性を没却して仏教思想と深く結びつき、仏教が主で庭が従という觀念に基いた庭、茶の湯の道具の一つとして、無理矢理にわび、さびを表現せんとして作られた庭、これらは皆一定の法則に忠実に従って形式化されたもので、そこに何の感情も含まぬものがあまりに多く見られる。

しかるに、詩仙堂の庭こそは、自由な精神をかるく作庭された唯一の傑作であるといっても過言ではないだろう。吾々が庭の前に立つ時、何等の無理を感じさせずに、理屈抜きで誰しも都会の騒音に波立つ心を鎮め、本来の平穏な自分を取り戻す事が可能であろう。

真夏の太陽をガラガラと受け、単調なセミの声を聴かれずしみとる龍安寺の石庭が、おしこまれた、今にも爆発せんとする、おもぐるしいざりざりの岩裂な感情の逆りを感じさせるのと、あまりに対称的ではないか。龍安寺の石庭が空間をたくみに利用した視覚に訴える庭ならば、詩仙堂の庭は、靜中動の趣の庭といえよう。

・(終)

詩仙堂は京都市左京区一乗寺町、比叡山の西麓にある石川丈山の旧宅。丈山は漢・晋・唐・宋の三十六詩仙の像を狩野探幽に描かせて、これを壁に掲げた。



# 北海道紀行(中)

相宅 省吾

## 花の街

虻田(あぶた)より室蘭・苫小牧を過ぎ、汽車は石狩の原野を走っていた。広漠たる原野には葦が生え、沼が光り、所々に白樺の林があった。北に行くにつれて美しい“サイロ”をもった農場の異国的な風景を楽しんでいると、忽然と大都会についた。即ち東京以北オーの都市、札幌である。ここで佐々木さん達に別れた。人の住まぬ原野に全く人為的に作られた街路は整然と暮蟻の目の如く、家並ははるか藻山、阿山などに続いていて、そして、街の真ん中を通る一番通と言う巾60米の大通には、したたる様な緑の芝生が続き、市内の花屋さんが競って作りあげた美しい花壇が、豊かな色彩と芳香を放っていた。此の芝は内地の高麗芝とちがって、欧州で見られるのと同じ牧草だそうである。

此の浅緑色の絨氈に腰を下し、行き交う人を眺めていた。さめやかな屋、軽衣をひるがえして近代的な若い女性の群は流れて行き、花園ベンチには老夫婦が静かに座っていた。その向うには、超近代的なテレドールが美しい弧を描いて雲の行く手をさえぎっていた。

程小路の盛り場を通り、二十数年振りに北大に友人を尋ねた。エルムの大木の中に美しい大学があった。そして植物園には、木には短い夏を楽しむ様に色とりどりの花を咲かせていた。

友人と共にまた街に出た。街々には火が灯り、香ばしいとうもろこしを焼く香がただよって来た。口に入れると甘い味に故郷のかまどか火を見出した。急に漂泊の思いが湧いて来た。反り引きとめるのも聞かずに、北に行く汽車に乗った。(準急“利尻号”)

## 我 枕

目が覚めると、夜は白々とあけて来た。原野は泥炭地帯の痕跡を呈していた。林はまばらに、いたるところに湿地帯が抜がっていた。不毛の地、天塩のツンドラ地帯のはるかに、放牧の馬の走るのが見えた。

汽車は予定より遅れて稚内の町についた。最北の町、基地の町、そしてトロール船の町でもある。昔は樺木に行く港として、随分立派な岸壁のある港で

あったが、今は只、利尻、礼文の連絡船に使われているのみであった。

100 tonばかりの礼文島廻の船に乗った。船が港を出ると、ノサップ岬の燈台と電波基地が見えて来た。雲はひくくたれ込め、ソ連船が木材のいかだを引きながら、波間をたゞよう様に進んでいた。

外海に出ると時々日射があった。しかし潮風は真夏と言うのに肌寒い様であった。船が進むにつれて、利尻の山が見えてきた。甲板には人が集って来た。その中で昨夜の夜行で一緒になった小樽の学校より鴛泊(おしどまり)の父母の下に帰る小女の姉妹がいた。写真のことから親しくなり、島の話、京都の話など、互いに新しい話題があった。波のうねり、エンジンの音、夜行の疲れかまどろみ始めた。北の国の小女の髪は黒く、その双頬は桜色であった。寂枕と言う詞がふと思ひ出された。

船は礼文島の香深(かかか)に寄港した。此の礼文島と利尻島は天梯島(あまのしだ)と呼ばれ、いつか日蝕で名を知られたこともあった。海辺に逆高山植物が生え、海岸では昆布などを取っていた。土産に大女子(おおなご)と言う魚の燻製を買った。船は香深の港を出て、一時間定らずに目的の利尻島の峯形(くつがた)の港についた。“くつがた”とはアイヌ語で岩の多い所という意味だそうである。

### 峯形の宿

宿に着いたのは未だ昼過ぎで時間もなかったので、バスで島一周することにした。バス停留所で待っている女の人の頭には、カトリックの信者のかがる“チウル”の布の様なものをまとっていた。はげしい風を防ぐためと考えられる。バスは、広々とした裾野を通り、又対島海流を真正面に見える断崖の道をあえぎ、鴛泊、仙法師、鬼脇の部落を通過して一廻りした。

此の島は17/8mの利尻岳を核心とした、南北18Km、東西15Kmの四形の島である。一廻りするのに、3時間程かかった。

夜、風呂に入り食事をすますと、大鼓(おおづつみ)の音が聞えて来た。それにつられて出て見ると、丁度十三夜の日が輝き、どこから出て来たとも分らない人波が金輪の輪をつくつくいた。

鰯(いわし)が来なくなって早や数年、その最盛期には海が白くなる程来たと言うこの春吉魚に見捨てられた此の港は、閉された炬の家が続き、集った人々は魚と共に去って行ったが、残っている人達が夢をもう一度と、昔の大漁踊を舞っていた。その中でもあそびめの姿があわれであった。

踊のうずからのがれて、外に出ると北の夜の風は涼気すらおびていた。

宿に帰り人々の話を聞いた。漁業は衰える一方で、頼みの昆布、ウニの漁獲が段々少なくなって来たこと、それに引きかえ観光客が増して来たとの事であ

る。山水の美の極致ではあり、蛇、猛獣もない此の島は、その意味ではめぐまれてはいるが、そして飛行場も出来るそうではあるが、物好きな私の様なものにとっても遙々と来たもの位と思う程である。

床に入り、トランジスターラジオに耳をかたむけると、異国の音楽が聞えて来た。此の時程、旅情の身にしみた事がなかった。

### 利 尻 岳

翌朝、目をさますと残念ながら曇っていた。行けるところまで行って見ようと、リュックを背に出発した。目指す峯は雲にかくれて見えなかった。

広々とした磯野を過ぎ、樹林地帯に入ってしまった。白樺の大木、とどまつの森なお暗い樹林の中を直は細々と続いていた。

樹林帯を抜けると、はいまつかしとぬであった。空は急に暗れて来た。雲の上に出てしまったのだ、けわしい利尻の峯々が見えて来た。内地では見たことのない見事な遠松の香に酔いながら、まぶしい日光々あびながら、パンツひとつになって登っていった。蛇も熊もない、その上種恐ろしい人の子一にも居ない事に安心して、時に岩つばめがはげしい羽音を残して飛んで行った。

頂はいよいよわけわしくなった。目を樂しみます高山植物が現われて来た。

あざやかな紫色の花をつける細葉トリカブト、金色に輝く鬼術 等々。

茶い色には残雪があり、目の前にはコーソク岩がそそり立っていた。

頂上についた。空はあくまで晴渡り、下界は白い雲海にとどまっていた。しかし海の上には雲がなく、礼文島の上 更に我国の領土をなくなった樺太の上に厚い雲がおどっていた。写真を撮り、8ミリを廻した。しろい岩膚を樂しみ、時間の過ぎるのを忘れた。

帰りは、鴛泊への直を取った。美しい草原があった。高山植物の咲き乱れる花野があった。そして何時の間にか又雲海の中に入っていた。乳の流れる様な雪は流る、亭々たるトド松の枝に寄生する霧凇からは、しづくがしたにっっていた。

町は静かに落ち着いていた。陥没地らしい港のまわりには、白い断崖のある小山の上に灯台があった。大きな樺木犬が居る。その眼は澄んでいた。

帰りのバスに遅れたので、ハイヤーで沓形の宿に帰った。

### 霧 の 流 れ

翌日、七色のテープに送られてなつかしい港を出た。海は荒れ、霧が立ちこめて来た。稚内の町は霧の中に沈んでいた。

親切に迎へに来て下さった木山さんの家に案内された。家には、ストーヴが

赤々と燃えていた。軍中この火は消えることがないそうである。

トロール船の見学に行った。取りたてのホッケ等が船底に満載されていた。ロープ類も、段々ビニロンに変わりつつあった。網は全くナイロンになってしまっていた。此のために出漁回数が増し、一回の漁獲量は減っても、総量は増大しているとの事であった。

車に乗り公園に案内された。細長い町であった。海の霧は流れくいた。更にノサツパ岬に迄行って見た。有名な燈台があった。ラジオロケーターの網が張り廻らされていた。国境の緊張が感じられた。廠を組む基地の女や兵達の間にも濃い霧が流れていった。

久しぶりに木山さんの楽しい家庭で夕食を頂いた。特別用意して頂いたタバコ蟹の大きさに驚いた。足一本で満腹した。長さが1ル程あった。土産に残りをいただき夜の汽車に乗った。北見のトンネルを通り、丸瀬布の町についた。此処はオホーツク海に近く、大雪山の山ふところであった。

友人の家に行き、土産の蟹を食べ、外に出た。

此処にも霧が流れていた。町の裏手は原始林であった。翌日は材用軌道で人の行かない大雪山の谷に入る積りであった。その用意をしているとき、電報が届いた。函館の港に蟹工船が入港するとあった。急いで計画を取り止め、小林多寿石の蟹工船のイメージを描きながら汽車に乗った。

## メーデー・フェスティバル

湊田 幸代

四回生の生活は朝九時前には始まらないものです。

ゆっくりと春眠をむさぼり、青葉の下を心ゆくまで散歩したとしても、柯の淺礎も起りえないのです。生活は狭く、青春を詠歌する時に溢れて、春四月、当然起る新しい事態にも漠然とした期待と不安をもっただけでした。

所が、企業体の中に入ったとたん、ラッシュと競争という激しいものに心身をゆすがられます。

企業は新入養成と称して、企業への同化作用を盛んに要求します。いわく、一人一人がセールスマンです。あなたの笑顔は会社の笑顔です。五月の連休がやって来る頃、そろそろ羽根をのびたくなりました。夜行にとびのって翌朝降りたった東京入童州口は、折りしもメーデーでした。初く仲間の一

肩となって、初めてのメーデー。字に読み 耳に聞く、組織労働者の団結を  
とくとみて来たいと思い、新宿御苑へ出向きました。

常日頃、頽廃の極に達した「甘い生活」の環境に住み、「我が斗争」のヒッ  
トラーが、論理もない呪文で人々の共感を呼び、組織しための時代が、今の  
日本と類似しているのを感じるにつけても、正しい論理と力をもった組織が  
欲しいと思っているのです。そのにない手、組織労働者は私のイメージの中  
では、腕を組み合わせ、意気高らかに高歩していました。

目の前にメキシコのフェスティバルの様な華やかな街が展けた時、「黒いオ  
ルフェ」の小女の様に眼をみはりました。お揃いの赤いスカーフ、青いスカ  
ーフ、鳩の羽いたスカーフ、お揃いの工カク 海辺の様な帽子、首に踊るレ  
イ、「楽しい風船旅行」をしている様に青空に泳ぐ赤い風船、からむ青い風  
船、黄色い風船、「ペペ」の様に楽しげにさまよい歩く人、伴奏する人、合  
唱する人、腕を組み合った二人、パパの肩車で風車を高く風にまわす方や、  
坊く人の喜びが一杯でした。夜汽車の疲れは、何処へ預け来たのか、私も  
スーツケース持ちというそぐわれないエトランゼ姿を仲間入りしていました。

前で歌っているハンサムボーイは何軍位勤めたのかしら

私は僅か一ヶ月だけど長かったわ。

社長さんが言ってたっけ、我が企業は、新しい経済カチを創造し、人類文化  
に貢献し、その当然の報いとして利潤を得るのだと。

所長さんが言ってたっけ、研究所員の喜びは、日々たとえささやかでもオリ  
ジナリティをもって前進することだつて。

私は研究所で、重合実験をやりながら、マンハントも羨しいナ、ロゴスの神  
に杜えるのも良いナと考え、社長や所長の近代精神も肝の中にしまっておこ  
うと思ひます。

そして時々、こうして坊く人が手をつないで喜びを伝え合い、分ち合い、輪  
を大きく、大きく、世界中を白い花の輪でつなげにらどんなにか素テキでし  
よう。その時には、白い百合をもって、白いベールをかぶってフェアリの様  
に舞い歩きたい。

青い地球に白い花輪をかけるのは、「甘い生活」の環境を打壊することを考  
えない限り、お陽様にのりこむことを考えるよりむずかしいのかも知れませ  
んけど。

おわり。

( 高分子化学工業 K.K. 高分子化学研究所勤務 )  
昭和 36 年度卒業

# 「もっと何かをしようじゃありませんか。」

## 2回生 樋本 勲

入学して一年の間に、本学の学園生活のあり方についてこれこれと考えたことがあった。しかし一年経った今日そのことについて顧みるに全く実現不可能と考えられることがある。入学早々は実現可能であろうと思っていたのに今では全く見向きもせぬとは一体どうしたことか。私の理想が余りにも非現実的であったせいであろうか……。

一年経った今 当時考えたことを反省するにふさわしい時期だと思って筆をとりました。そこで決して実現不可能なものではないと思われるものを一つ二つ述べたい。その一つは過去一年間一番切実に感じた先輩(上級生)との交流の件である。辛い寮には入れた自分は三四人の優秀なる上級生に接する糸口をもつことが、できたが、寮にも入らず、又クラブにも時間的な制約などで入って居られない人は一体上級生と接する機会があるだろうか、少なくとも寮にしろクラブにしろごく限られた範囲の人々に接するのみだと思う。この科は全部で160名をこそこだと思う。一年間にその大半と親しくなっても何ら不思議なことではない、むしろ大半を知らぬ方が不思議であろうと思われる。そして不思議なことに大半の人が大半の人を知っていないのが現状ではなかろうか。

この際私は次のことを提案したい。四回生の方は実験やら何やらを多忙だと思われるので、二三次生が中心になって、定期的に一つの研究室の先生と先輩を囲んでの茶話会を土曜日の午後図書館の二階か又は外で開けないものでしょうか、そしてその場では種々の話題について語り合い、研究内容について議論し合おうではありませんか。そうすれば先輩を知るのみならず師をも知ることが出来て大変有意義なことと思う。こういう場で出来た対人関係は未長く続くものと思われます。

もう一つは非常に手ごろなことでNo.6に今の四回生の佐野さんが提案されました私達が自由に使える掲示板を作る件、これには大賛成です。下宿やアルバイトの受授、個人的な向合わせなどに使用するもので是非ほしいと思います費用がある(少し足りないかも知れんといっておられますが)そうであるので何んとかしてしようじゃありませんか。

いづれにせよこの学園生活には何か欠けている様に思われます、建設的な意見がありましたら同輩、先輩に話しをもちかけて、小さいことでも少しでも充実し、そして愉快な学園生活を送れる様に努めようではありませんか、些細なことですが、上の二つを提案し、実現されることを望みます

## ある一回生の入学感

### 1回生 鈴木 紘次

私が京都工芸繊維大学繊維学部繊維化学科という実に長い名前のついているところに合格したということを知ったのは、3月31日であった。翌日、学校へ来て自分の名前が合格者名簿にのっていたのを、自分の目で確かめて見たものの、全然嬉しいという気持は湧かなかった。

高校で普通より一年多く過ごし、一年間浪人をして受験の苦しみをいやという程味わっているにもかかわらず、受験雑誌の合格体験記に記されているような気持にならなかったのである。自分自身絶対に受かると思っていた一期校に落ちて悲しみのどん底にいた当時、両親に説き伏せられて二期校を受けて合格したのだから、合格したという喜びよりも、一期校に落ちたという悲しみの方がはるかに大であったことは確かである。

しかし一応手続きだけをして入学して授業内容を見て、もう一年浪人をするかを決めるつもりだったが、現在ではもうそのファイトも失ってしまっている状態で大学生活を一度味あうとなかなかもとへは戻れそうもないとも痛感した。

私ははじめから大学院へ行くつもりでいたが、現在の大学に入って他の大学の大学院へ入学することは困難だろうし、また入学してからも、ハンディマップがあると思っていたが、先日の懇親会で町田教授の毎年教入入学しているという話を聞いてほっとした。

現在は運動部にも入り、休日を利用しては京都の寺院をまわったり、野山を一人で歩き回って、勉強をせずして大学生活を楽しく過ごしている。

1.2回生のうちは、大いに遊ぶことを、モットーとしているが、「アー・ベニー・ツェー」に悩まされている。

なお、大学院へ進むとされている先輩諸氏や先生から、勉強をするに際しての心構えといったものを、お聞きできれば幸いです。

# 所 感

## 1 回生 井 上 隆 之

僕のような生意気な一回生にこの紙上で発言の機会を下さった上級生の方々に感謝します。入学して何でも感じた事を書くようにとの事ですので至意をも顧みずペンを執りました。おそらく次に述べる事を読まれて遺憾される上級生の方や先生方もおられる事と思います。然しどうか何も知らない新入生の愚意の無い私見と考慮してお許し下さい。

僕がこの学校にはいつて先ず感じた事は御多分に漏れずやはり(総ての fresh manが大学にはいつて感じるように)失望でした。然しこの失望は月並な、大学で受ける学阿に関するといったようなものではなく、おそらくこの学校特有の失望だったように思います。

その失望とはこの大学の学生の思想的幼稚 無気力と言う事です。長い受験生活の痛手からなよって、さあ頑張ろうと思った時に目の前に見せつけられたのが全くの無気力だったのです。おとなしい、良く言えばぼっちゃん的無気力だったのです。もとより僕は高校時代に自治会で活躍したり、政治的社会的な問題に深い関心を持っていた と言うような人間ではありません。然し大学と言う所はもう少し若いしつかりしたエネルギーに支えられた学生運動が存在している所と考えていたのです。僕のような者がこれ程失望を感じたのだから新入生の中にはもっともっと痛憤やる方なく感じている人々が居る事と思います。それとも受験の精神的ショックが癒されないまま皆この学校の校風に慣らされてしまったのでしょうか。

入学式が終つて向もなくC科の懇談会がありました。その時見せつけられたのが上級生たちの多愛もない幼稚な小ざけとサークル勧誘だけだったのです。少年らしい若々しさはあっても青年らしいエネルギーは感じられませんでした。その席上僕(否、おそらく新入生総てであろうが)の非常に驚ろいた事がありました。在る先生が新入生への注意事項等の中で次のように言われたのです。「君たちは何人としては社会主義的思想等々に興味を持つのかまわぬ。然しこれを学内で団体として活動に移すのはやめていただき



たい。そういう事をやりたい人はどうか退学して他のそういう運動のもっと効果的な学校へ行行ってやっていたらいい。」これを聞いてまったく驚いてしまったのですが、後の方の上級生達の顔をのぞいて見ても別段反応のあつたような様子は見られませんでした。皆んな不眼も無さそうにおとなしく聞いていたのです。これは、たとえ先生方の学生の為を思う心の切なるが故の事であったとしても、明らかに不当な弾圧です。戦争前ならともかく今の世の中に超然とこのような状態ですま返っているような学校があるとは何とした事でしょうか。学生運動をやるかやらないか、そんな事が問題なのではありません。こう言う事を先生方をして言わしめるような学生の精神状態が問題なのです。このような暴言(敢えて暴言と言わせていただきます)をはいても後で何ら問題も起らないという気風は実に恥すべきではないでしょうか。更に先生は次のように言われました。「諸君も御承知のように本学の就職状況はまことに良好である。それには他にいろいろな理由もあるが一つにはこの学校は学生運動が汚穢がなく学生の思想が穩健、健全であるからでもある。どうか諸君は先輩の築いたこの立派な伝統を壊すような事をせず、自粛して勉強に励んでいただきたい。」……これはまことにもつともな事です。就職の為には一応おとなしくしておく方が賢明であるというのは当然な事でありましょう。然しこの伝統が立派なものであると言うようなはっきりした先生の割り切り方には僕は非常な反感を感じたのです。将来を考えるの余り小利口になるのがどうして立派な伝統なのでしょうか。僕には恥すべき伝統のように思われます。このような言葉にももつともつと学生は反感を感じるべきではないでしょうか。

先程も述べたように、今は先生の云われた事を問題にしているのではありません、先生をしてかく言わしめるような学生の気風を問題にしているのです。

上級生の皆さん、元気を出しましょう。また新入生の皆さん、この学校に新しい空気とエネルギーを注ぎ込もうではありませんか。理工系は実験、実習等で暇が無いのは良く知っています。しかし理工系は研究ばかりやっておって、政治社会問題等は文科系に任せれば良いと言ったものではありません。暇が無ければ無いなりにやっついていなくてはなりません。現実の世の中には学生の純粋な眼をもって直視し、鋭敏な頭脳で思索されなければならない問題が一杯あります。また、誰の心の中にも現実世界に対する横りやそれに対する自分の考えといったようなものがある筈です。

まず手始めにこの小冊子を、文藝的な物も勿論結構ですが、現在の単なる小中学生の文藝のようなものから、大学生らしいエネルギーに溢れた思想、現実社会への批判の交換の場に成長させ、入学式の時に中沢学長の言われたような全人的な修練の場としようではありませんか。

この拙文が少しでもこの学校に生気を吹き込み、自治会等の活発化するきっかけともなる事を祈ってペンをおきます。

## 我々は決して無気力ではない

4回生 真多勇夫

新しいファイトと意気に燃えて我々の繊維化学科に入ってこられた新入生の諸君に拙文ながら一言述べたい。

まず期待に反して我々の大学が気力に欠けているようにみられた方々も多く居られることと思うが、今年の新入生対面式の時の一部学生の黙じやれと、クラブ勧誘のみの状態になっしまったのを残念に思う者の一人である。

第一印象は大切なもので後々まで先入観として残る場合が多い。私は四回生としてあの場合とえ少々時間をとつても上級生の一人一人に自分達の抱負や意見を語らせてもらいたかったと思っている。我々はみんなそれぞれ大きな希望と抱負をもっている。ただそれはある種の事情によって言えにくいものであることだ。つまり政治運動のような「華やかさ」はなくて、地味な目立たぬ研究によって将来人類の福祉に役立つことを願うというきわめて平凡なこと——これこそ化学を志す者にとっての大切な心構えである。忍耐と気力なくしては学問などできない。

尤もに「学生運動は慎んでほしい」旨の町田教授の話に抵抗を感じた人達にいたい。先生の言われた学生運動は多分約十年前本学で起った一部の手段を選ばぬ過激派の学生達の煽動による事件を指しておられるものと推定する。とにかく学生が学業を放棄してまで学生運動に参加する事態は望ましくない。ある問題の解決に対して手段を選ばぬレジスタンスは百善あって一利なしである。我々のように将来技術者を志す者にとつても、決して世の中の動向に無関心では居られないし事実無関心であれば技術者として貢献することもできないであろう。従つて何人何人がそれぞれに世の中の動向から逃避するのではなくて健全な良識をもって事態に対処していくだけの能力を

養うべきだ。つまり徒らに極右または極左の軍国主義的な英雄主義におどらされぬことなのである。彼等は弁説が巧みであり群衆の中の愚民を惑わし自分の好きな方向にひっぱっていく能力をもっている。我々はこれに惑わされてはならない。しかし我々が立ち上がらねばならないときにはためらわずに自分達の考えを主張し為政者に反省を促す手段をとるべきだと思う。これは学生運動ではなくて社会運動である。

次に自治会活動が低調であることは、本学に限ったことではなく、日本全般の傾向であろう。しかし反対に言えば自治会を必要としない位学内の自治がうまく行なわれているということも言えるかも知れない。いつでもいきり立っているのが活気があるということではない。何らかの向題が起った時に立ち上がってこそ効果があるのだ。これはしかしながら容易なことではない。自治会指導者達の余程の周到な準備と信念と多くの学生が関心をもち支持をしている場合でないとは実現しない。何か新しい事柄を行なおうとすると、必ず実施することの良し悪しは別として大きな壁にぶつかる。私が自治会委員長を勤めていた時も大学新聞の発行をはじめとして、新設クラブを認可することやレコードコンサートを開催することについてまでこれをやめさせようとする干渉を受けた。悪くいえば大学という所は非常に徹底した事勿れ主義の塊である。それが証拠に前例のあったという事柄の場合は無条件で許される。自治会に限らず大学内で改めなければならない事は数多くある。

たとえば、試験のやり方、単位認定のやり方にも向題がある。実際今の方式では講義に出なくても単位を取得できたり要領よくたのまわった者がより成績をとれるという弊害を持っている。講義の内容についても幻滅を感ずるものが多いことも事実だと思う。十年以上も同じ講義録を棒読みしているようなものは何のための講義なのかと疑いたくなる。

この様な向題を改善していくために、どのような手段をとれば、我々の意志が反映できるのかということをもみんなで論じあい研究していく必要がある。根本的に大切なことは、これにも増して周囲の環境が無気力であると単に非難する前に自分自身が学向に対して情熱を燃やすことなのではないかと思う。つまり自分に対して自信を持ち能動的な生き方を求めることである。

# 人さまざま

3回生 大野 徹

人の思慮行動というものは、その人の体験に基づく争が多い。しかしそれだけでは不十分であって、他人の経験を取り入れて自分のものとする場合も多い。そこで僕の脳裏に焼きついた人について書いてみよう。

時は浪人時代。怠け者の僕は果して毎日を勉学研究に没頭している人がいるのだろうかと思つた。ある時予備校の老教師が、「本を詠んでいると歌謡曲が聞えてくることはあるが、自分から聞こうと思つてラジオをつけた事は今までにない。」と言われた。又「私の哲学上の考えは三十才頃のものと同様のもので変わらない。」とも言われた。その人は僕の疑問を解くに値する人だと思つた。

父の勤め先関係のA氏(四十才位)が来られた事があった。朝食がまだとのこと、朝食を用意し、ここ数日間睡眠不足とのこと、復床を与えた。そして夕方まで寝、夕食後父と一緒に出かけに行った。父が帰つて言うには、A氏は数日前勤め先をとり出し空小屋に寝たり野宿したりしたそうで、そこでその前の勤め先の主人の所へ行つて事情を聞いたところA氏は人はいいのだが、酒に溺れあっちこっちに行つて迷惑をかけてきたそうでどうしようもない。就職も技術はあるが学歴が浅いため思うようにいかず例えうまくいつても長続きしないとのこと、A氏はこういうことになつたのは自分が悪いと知りつつも生活を建て直す意志もない。確かに家に来られた時も赤ら顔で食事あまり食べず水ばかり飲みしかも家に居る間中便所へいかずどこか病気の様に思えた。家を出る時に疲した若干の金で又酒でも飲んだのだろう。

御存知の様に御室にろう(聾)哑学校があります。いつだったかバスが混んでいる時に僕の前にその学校の女生徒(小学二、三年)が坐っていました。途中で彼女の隣の人が降りたのでいくらかすみまができました。彼女は手まぬで坐るように言いましたが僕には無理の様に思えたので鞆を置きました。

# 神話と伝説の町を訪ねて

4回生 川端 宗成

この春林及び福岡に療いだ姉の家を移居地として九州旅行をした。全くの一人旅とてころらでは全々予定も立てず、姉の家に着きつくり悉くしてから旅程をたてた。旅行の計画をぬっていった、義兄と義兄の家にいる看護婦さん(義兄は開業医)が是非「高千穂」へ行っこのいと口をそそえさる、よくよく聞けば義兄が若き日インターンを終え始めて一人前の医者として赴任した所が創立されにばかりの高千穂町立病院であり、いろいろの釈しかつたこと、苦しかつた経験など、話に花を咲かせる。又看護婦さんも生れてからついこの二月までそこで暮してきた人だった。

義兄としても若き日の追憶にふけり、看護婦さんとしても生れ育つた故郷のノスタルジアにふける風だったが、僕にはほとんど耳にしたことのない土地だったので旅程に加えるに気が進まなかつたが二人があまり薦めるので、自他共に認めるどころの生来の僕の協調性に富む精神からしておねることにした。博多を朝早く発ち、熊本で途中下車し全くつまらない城やすこしばかりよい水前寺公園を見物し、雄大壮絶ではあるが何のうるむもない阿蘇の火山を見ながら中より立野聖由で高森に着いた時には既に日暮れ何と形容してよいのかわからんがさびしい感じがした。(これがいわゆる旅愁かとも考えた) 実にお粗末な終着駅前から高千穂行きのバスに乗りこんで驚いた。

実直そうな土地の乗客の大きな話し声(僕には意味がとりにくかつた)の中から一きお美しく、さゆやかなよく意味がわかつた言葉で話してくれる車掌さん(おは)にからだ。しかもその車掌さんが美人ときこいる。外はもう真っ暗なバスは曲りくねつた急な山道を二時向半ばかり走りつづけるその間中僕は彼女の一举一動に見とれてた。旅にはつかれるし、外の景色は暗くて全く見えないせいもあったが……。

恋とか愛とか何ら知らず経験のない色音痴の僕が女の人に見とれるとは誠に不思議な気がした。(このことが関係あるのか関係ないのか知らないが) 高千穂について目ざす旅館の所在を聞いたら親切丁寧に放して下さつた。そのすこし以前より小雨は降り出すし全く心細かつた(この僕がである)ので、正直言つてうれしかつた。翌朝からりと空も晴れ、高千穂駅を観光見物

しようとして観光バスに乗るつもりでバスの出発するところへ行ったら彼女が受村では、えみかけているのではないか、あゝ夢じゃなかつたか、目がくらくりとしてぶっ倒れそうだったが、僕は倒れなかった、日頃のラグビーで鍛えた身体でやっとな支えた。その日一日の案内を彼女がやってくれるのかと思うと血をみぬく心地だった。だがあに因らんや人生は皮肉だ、案内人は全く別の入った、しかしこの人が又すばらしい女の子だった。バス会社もこれだけよくまあすばらしい女の子を雇ったものだと思う。　僕が考えたのにあの地方では大都市に於けるように若き女性の職業としてオフィスガールとか、こましゃくれたデパートガールというようなのがなく若き女性の種々の職がバスガイドではなかつたか、それでこれ程粒がそろっているのだらうと思つてみたりしにがこの浅はかな考えはまちがっていた。いたるところで非凡な魅力ある女の子がごろごろ居た。(この表現は少しまずいと思うが筆を散りばめたようにではどうだろう)

旅館の女中さん、茶屋の娘、みやげ物屋の娘、皆然り。

総体に皆色白で髪黒く目はパッチリと黒く、しもぶくれの顔だった天孫降臨の地と言われるこの地方の人々はその昔日本國に隣接の半島や大陸からの血がまじらない純粋と言う感じがした。

しかし彼女達<sup>ひが</sup>日向の女の恋は昔から現代に到るまで「顔で笑って、心で泣く」形のものであると言う。これは西日本新聞の調査によるから確かだ。だから数多くある伝説もそのような悲恋を含んだものが多いように思われる。又景色のすばらしさは格別だ。深谷美のすばらしさは格段で、水清く、雄大にして、情緒たっぷり、とても拙筆には表現出来なないものだ。

ほど百米もあると思われる切り立った絶壁を見上げては感嘆し、見下しては胆を冷し行けど行けど、とぎれぬ深谷に無限を感じた。

谷間の水に浮かぶ小舟からは土地の古来の歌が両側の壁に反響して朗々とひびき、夢の境地に遊ぼうようだった。

観光バスは僕達乗客十数名を乗せ、日野良子嬢(バスガイドのお名前です。何と美しい名であることよ!)の伝説と民謡をまじえた案内で日本民族発祥の地を遡んで行く、民家のかや葺きの屋根は千木<sup>ちぎ</sup>をのせ、直行く女は“かるい。(これは竹で編んだ背負いかご)を背負って行く、うら若き乙女が紺がすりの着物をもんぺにわらじばきで、あねさんかぶりしてこの“かるい。を背負って険しい山道を登り降りするのは純朴そのものだ。

高千穂峡の茶屋で昼食に出されたにじますのべんとうは味もさることながらべんとうそのものが興をそゝるものだった。

大い竹の二節分程を切りとり真中から二つに割って一方にめしを入れ、他の

一方に新鮮な上手に味つけされたにじますがのせられていた。

又食前に京客すべてにふるまわれた“かつぼ酒”のうまかったことよ。

僕は生来下戸である上ある種の肉体的な欠陥(僕は貴志先生程遠観の境地に到らないし、女の子にもてたいから、人前で大きな声で言えないが)におびやかされるのでアルコールは皆目だめであるが、それでもつい杯をかさねるほどだった。このかつぼ酒は竹の三節分か四節分を切りとりその中に地酒を入れ、飲む前に外鍋を火にあぶり黒くこがすと中は丁度燻され竹の精がしみ出て独特の味と香りとこくがするのだそうだ。(僕はその鑑別は出来なかったが“いとしの彼女”に放してもらった)

高千穂岬を後にしてバスは急勾配な曲りくねった山道をあえいで、たどりついた岡見丘の景観は遠く阿蘇の山々を望み近くの谷間には点々と刈干し草が積まれ一望に点在する村々の屋根を見下した一時は古代にかえり、これより民族のふるさとを後にして野蛮人の在る喧噪の地に出かけて行くような錯覚におらいつた。三時間ほどの観光する間に他の京客やいとしの彼女とも親しくなりそのまゝ別れるにしのびない気持ちになってくる。

写真家のシャッターは無意識のうちにおされ、観光を終えバスの発着所に帰ってきて夢さめる思いでしっかりと気をとりなおし“いとしの彼女”の写真を撮ろうとしてフィルムが切れているのに気付く始末。何というタイミングの悪さよ。だが今も僕の網膜と心の中に彼女と高千穂の印象はしっかりと残っていて離れない。(これが恋というものか?)

その後の旅行中、いや旅行を終えた後までも僕は何かにとりつかれたようになってしまった。この旅行は僕をあまりにもロマンチックにしてしまったようだ。

皆さんも今後九州を旅行される機会があったら是非日向の國の高千穂を訪ねられることをおすゝめする。

高千穂は熊本側から行ってもよいし延岡からバスで入ってもよい。

延岡に抜ける道中のすばらしさは又別の機会にしるしたい(こんなくだらん旅行記はもういやだと言われるなら止めるが)

最後に高千穂民謡の歌あるうらの一つで僕の最も気に入ったのを紹介してペンを置きます。

こゝの刈り干しや、すんだよう、

明日は田んぼで 稲かろかよう、

最早や日暮じゃ おごこ 追々かげるよう

駒よいぬるぞ、 荷を負えよう、

# 映画をみて

1回生 向井佐保子

先日「ラインの仮橋」「ゼロ地帯」という戦争をテーマとしてその中での人間の生き方を描いた映画を見ました。いろいろ考えさせられる問題を多く持っていましたので、戦争について、改めて考えてみました。

個人としては、誰もが善長でしかもすすんで戦かおうとする意志は全くないのに、国家という強権の前にはどうしようもなく戦争に参加する人や、画家や一部の団体の宣伝にのって狂信的になってしまって「よし一つ自分をためてやろう」と考える人がほとんどです。真剣に戦争とは何か、何のために戦っているのかを全く考えなくなってしまいます。戦勝している間は、単純にだっ勝つこと前進のみしか考えません。戦況が思わしくなくなってはじめて、疑問をいだきはたして自分は何のために人を殺し傷つけているのだろうかと考えるものです。だがそれではもうおそいのです。いかに団体の権力が強くてもその構成員は各個人なので、各人が集団心理にとりつかれずつねから戦争に対してしっかりした考えをいできておれば決して戦争は起り得ないはずですが。近頃十千の残虐な行爲を描いた映画や写真集が沢山出まわっています。それらを見て戦争の悲惨さを再認識するのは有意義なことですが、単純にドイツ人は残酷な国民だとさめつけるのはまらがつていると思えます。戦争ではどの国も程度の差こそあれ残酷な行爲をしてきています。相手がなければどんなに頑張ってみたところで戦争はできません。どの国にも深い考えをもって勇敢に戦争に反対した人々がたくさんあったことを忘れてはなりません。(内垣啓一著「白バラは散らず」にドイツ人学生シエル兄妹とその学友達の死の抵抗運動が生き生きと描かれています)今のドイツの学生は戦後のドイツと世界の情勢を真剣に考えていますし、大変建設的な考えを持ってドイツ復興の為に努力しているようです。藤原正暎氏とドイツの友人の間にかけられた書翰集「僕らはごめん」を讀んで私達日本の学生ももつと広い視野に立って世界情勢を判断して、しっかりした考えを持たねばならないと痛感しました。単純なことです。各個人が「戦争はごめん！」という強固な意志を持てば、決して戦争は起り得ないはずですが。



# 或る憶い出

## 3回生 分部 好孝

春に浮かれたトラの子達が桜花にも、さつきにも眼をくゞらずに黒い土の上に落ちたるピンクのじゆうたんの上を死まみれの靴をはいて踏みたるは悲場の念にうちみしされる。

春の日本はとてもすばらしい景観を呈するといふ評判が外国にも知れ渡っていて、わざわざ観光に来る外国人もいる。彼等にしてみると島国日本亦是貧国日本だから小規模なカーニバルしかやれないと見る人もいるだろう。しかし外国人に見せる美観などありやしない。大トラ、小トラ達が立ち去った後には瓶や缶、紙屑が桜花の花弁の上に山積され、他の千鳥足のトラ達がその上を歩み、ゴミを一層散らかしてしまふ。静かな木影には男女二人が競争でもしているかの様にチューイングガムをあちこちに吐き捨てる。一人ずつ散らしていれば、恐らくこの塵埃の $\frac{1}{4}$ もないであろうに……。

我、曠きのあまり加蓋の中に消えた。庭を眺めたり、池を眺めたりしている内に奥の間に来てしまった。その部屋は小さいが床の間にあって、そこに右の柱に眩らしい高僧の懸け軸があった。住持の坊主が生けたにしてはとても女性的な大覚寺流の生花を前に紫坊主の懸軸、花の足もとにはこの部屋かいわれが黒い木片に書いてあり、青白い新しい畳とよいコントラストをなしていた。我は少し疲れていたしこの静かな部屋で考え事をしようと懸け軸の坊主とにらみ合つて長く座つていた。坊主はたゞ我を見つめるばかりで何も我に長き考えを与えなかつた。足はやゝしびれて来た。紫袈裟の坊主の根気よさにまいいり隣の違ひ襦の戸を開ければこの寺の生ける坊主が食べたのかソフトクリームの置き台が渦巻の箱の上に置かれてあるのを認め改めて嘆く。神聖な筈の寺にしかもこの部屋には襖絵があり、畳は新しく一見真に厳肅な長く手入れされた部屋に於てである。あはらしくなつて急いで回廊を歩み再び入口に出て来た。たまたま坊主に出会つたから、いかにも熱心な観覧者であるかの様に彼にいろいろと質問した。我は同じ拜観料だからと思つて争はたのだが、この坊主話好きだと思へて熱心に答ふ、その上再び寺内へ我を案内し、こと細かにあちこちを説明する。奴の全知識を我に聞かされたいかの姿であつた。再び入口へ戻つたがまだ全部言つてないと見えて我にしきりに

奴の部屋に誘なつた。確かに坊主の部屋らしく座机の上に硯と筆それに蛍光灯スタンドがあり、机の左手に教典が積み重ねられていた。しかし驚いたことに“土曜マンガ”という週刊誌が机の上に置かれてゐるのを見出し出した。奴はこれは当然のことと思つてか、あるいは奴に気づかれたことを知らいであ一向に顔色も変えず、茶ダンスから茶器と緑色の饅頭を取り出し、側の魔法ピンを引き寄せた。すばやく“おうす”をたて私にすゝめた。そのお手前は壁に入った、みごとなものであつた。蒸暗い部屋で色白い坊主の顔が美しく見える。その横手に白い畳の上で“なつめ”が無気味に黒く光つていた。私の家は仏教でないのであまり坊主のことは知らなかつたので僧侶の規律はいまだに厳しいらしい。またこの上坊主の話し方は口を小さく開いて案外良く通る高い声で話す。歌もさう下手でもないし奴等が酒の席上で都々逸や小唄をやればすごく人気があるだろう。

話は人生観から俗世話に進みと部屋を出た、すでに午後3時過ぎくらいであらう、たまたま私にとっては都合よく奴に末客があり、ようやく奴から解放された。しかし今思えば奴はひよっとすると厄憎であつたのではないかと思われる。尙未だに僧侶の規律はやかましいとのことと驚いた。日本は自由国といわれているが、ところどころに古の制度が残つてゐる限り純粋な自由国にならない。



## Adieu

2回生 金井 政洋

憐れみの悲しみを浮かべ  
その眼は紺碧の水をたたえ  
高雅な鼻をうごめかし  
口は堅く閉ざされて

みやがられたか  
すっとたちあがる  
青白き微笑

けいげうされているのもしらないで

# アメリカ便り

内野 規人

昨秋、アメリカ・インディアナ州に渡米留学された内野助教授のアメリカ便りをお届け致します。

このお便りは、町田教授にあてたもので、文中、“先生”とあるのは同教授のことです。尚、日附は今春4月22日になっています。



拝啓、日本もすっかり春の衰いをこらした事と存じます。

先生には、新学期が始り、転手古舞をなされていること、存じますが、教室員諸氏始め厚く御礼申上げます。旧論文生も、かなりの成果を挙げた由に、お便り頂きましたが、本当に大慶に存じます。新論文生はどの様な顔ぶれになりましたでしょうか。優秀な学生が来る様だと、成田君の便りにありましたが、期待が持る様だと嬉しいと存じます。

当地も四月末で春には尙ほいりませんが、先週の土曜には(15.6日)ひどい吹雪が、二日間降り続きびっくりしました。18.19日には急に暑くなって、半袖で外を歩き廻る様な天気です、それでも半袖でいて汗をかきました。変化の激しい気候にはびっくりします。今日は9℃程度です。

それでも、<sup>桜</sup>権木には花が吹き、<sup>榎</sup>枯木にもうっすらと緑色の芽が燃え始めました。あつという間に緑に覆われてしまうそうですが、春が短く、オーバー、ジマンバーを脱いだと思ったら夏だぞうです。

もう既に滞在4ヶ月で、残す所4ヶ月になりました。先生方には本当に御迷惑をおかけ致しましたが、お蔭様にて当地にも大分慣れ、英語も片言位は喋る様になりました。ラファイエット以外に殆んど出ませんが、それでも当地の色々な事がわかり、日本の良さも改めて見直し、良い経験をさせて頂いたと思いき、先生にも充分お体を大切にお暮らし下さいます様、お願い申し上げます。又お便りさせて頂きますが、教室員諸氏にもどうぞよろしくお伝いの程お願い申し上げます。

N. Uchino

— 内野助教授のお所 —

Dept. of Biochem, Purdue Univ  
W. Lafayette, Ind., U. S. A.

# カンジをなくそう

## 4カイセイ イキムラ アキラ 子

ワタシは、ツギのセンセイガタをうらむ。テツガクのミナミザワさん、リンリのユアサさん、コロイドのオウマさん、センイシケンのもリモトさんである。コウギがはやくてノートがとれないのである。ノートをとらせるというコウギホウホウをあらためないかぎり、これらのセンセイは、コンゴもいやがられるコト、ウケアイである。ところで、コレはセンセイガタばかりでなく、ワレワレ、ノートをとるホウにもセキニンがあるのではなからうか。すなわちノートのトリカタにクフウがなければならぬのである。1ゲン1クすべてコウギされたとおりにつすヒツヨウはない。そのヨウテンをしつかりつかみながらノートしていけばよい。ところがスジカンにもおよぶコウギになると、アタマのホウがなかなかそのハヤさについていかない。シゼン、テにだけまかせてしまうコトになる。それではアタマのわるいものは、どういうクフウをしたらよいのであろうか。

ソレにさきだち、カンジというモノのヒツヨウセイをかんがえてみよう。ワガクニは、カナモジカイというコクゴクジモンダイとシンケンにとっくんでいるグループがある。ココのヒトビトは、カタカナばかりをつかって、カンジをイッサイツかわない。ジムノウリツのウエからカンジをボーコトしようというのである。コレにタイしてカンジのヒツヨウロンジヤは、ツギうごとくハンロンしてくるであらう。

「カンジは、ニホンゲンカのデントウである。コレをすてされというマツは、バイコクドだ。コレがなくなるとブンシヨウがさびしくなるし、ホネのぬけたようなカンジがする。それにカンジには、1ジ1ジミナイミがある、ごからコレをみただけで、そのカンネンがわかる。それでブンメンをみただけで、どのヘンにどういうナイヨウのコトが、かかれてゐるかがすぐわかる。コレをなくすと×がちかちかしてよみづらい。もつとおおきなモンダイは、カンジにはドウオンイギゴがタクサンあるが、これをカナでかくと、そのイミがわからなくなり、これらのコトバのトリアツカイカタにこまる。」

コレにおこたえしよう。こういうカンガエをもつヒトは、ヒジヨウにデントウをおもんじる。ギヤクにいえば、ケンイにモウジユウし、そのあまいシ

ルをすおうとするジダイシユギシマ、ヒヨリミシユギシマで、「おぼれるモノは、ワラをもつかむ」のタトエのごとく、ヒッシはカンジにしがみついて、カンジとならばシユギシマもかぬまいとおもわれるヒトビトである。ヒトムカシマエまでは、カンジはケンイのショウチヨウであつた。カンジをよりおおくしているヒトは、それだけえらいとおもわれていた。カレラは、セッカクきずきあげたキンジトウ(カンジトウといたい)を、けがされぬようにそのマワリにカンジというジョウヘキをめぐらし、トウシあるものにはコンナンを、オクビョウモノのムガクシマにはケンイをみせびらかしたのである。ワタシもそのギセイシマのヒトリであつた。カンジがよめん、かけんといってオオビイのマエでよくわらわれた。はずかしいオモイをたびたびした。それでおとなしくイツショウケンメイカンジをおぼえたものである。ところでトウヨウカンジがシテイされ、ノルジさえしうていけばよいというコトになり、それをイチオウ、マスターしたアトのカンジとしては、なんらカンジのヨサをしるどころか、かえつてカンジにハンカンをいやくうになつた。おもえば、ワレワレは、カンジをおぼえるのにどれだけのジカンとセイリヨクをかけたであらうか。ソレがムダなシゴトだとしりながら。ついサイキンのコトだがテレビで、カナモジをテッテイしてジムにオウヨウしてよいケツカをあげているカイシマのハナシがあつた。ワタシは、コレをみてトタンにうれしくなつて、サツソク、ノートトリにオウヨウしてみた。なかなかセイセキリヨウコウである。タニンのかきもらしたカシヨでも、ソツウのヒッキソクドで1ゴもおとさずノートがとれたのである。それにスマートだし、アトからよんでもよみやすく、ガクシユウイヨクもわくというモノである。

イジョウのごとく、カンジにへばりついていては、ゲンダイのスピード、テンポのハヤサについていけない。クシンしておぼえたモノをすてるのは、おしいかもしれないが、そこがユウキである。カンジのショウシツは、ニホンアンカのドクソウセイをなくすモノであるとかやしがるヒトがあるが、ショウライ、セカイレンボウをつくらうというウゴキがあるナカで、カンジはまったくアシデマトイになるだけである。なぜニホンガイクトクベツシてかんがえなければならぬのか。セカイジユウのすべてのニンゲンは、ドウホウである。ショウライきつとセカイゴができるであらう。イケダさんは、クイズはイキモノだといつたが、ワタシはコトバはイキモノだといいたい。どちらもイキモノたるニンゲンがつかい、うごかしているからである。ニンゲンとおなじくセイメイをもっているコトバを、ふるいカラのナカにと

じこめておけば、きつとバクハツするにちがいない。ワレワレは、しんせしまったカゴをフミダイにし、ゲンダイのナカをいびき、じつとミライをみつめながらいきていかねばならない。コトバはいきているからジカンとともにそのもつイミがかわってくる。ワレワレは、そのゴゲンがどうのこうのというコトは、モノズキにまかしておいて、つねにそのトキそのトキにつかわれているコトバのイミだけをハアクしていけばよいのではなからうか。むずかしいコトバは、かなぐりすてて、わかりやすいあたらしいコトバをつくっていけばよいのではないか。ソレにはまずテをつけねばならないコトは、カンジをなくそうというコトである。

まだカイトウすべきモンダイがのこっていた。カナにするとブンメンをみたげでどういふナイヨウがかかっているかズハンダンできないというヒトがあるが、これはワレワレがあまりにもカンジになれすぎてしまっているためにもつサツカクではなからうか。セイヨウゴには、カンジのごときイミとオンをあわせもつモジはソンザイしていない。オンをユウするモジをテキトウにくみあわせてナニカのガイネンをあらわしているのである。ソレでいて、たとえば、エイゴのブンシヨウをみれば、どこにどんなイミのタンゴがかかっているかがすぐにわかる。コレは、エイゴではワカチガキがテッテイされているためである。それではニホンゴにもワカチガキをこころみてはどうかというギロンがさる。いやジッサイにカナモジカイでは、カタカナの私をつかってワカチガキをしている。ところが、ニホンゴは、ヒジヨウにフケツツで、カツヨウゴビをユウするヒンシ、ジヨシ、がいろいろじって、たとえソレをヨウソベツにワカチガキをしたとしても、よみにくいし、かきにくい。コレは、カタカナのみにたよるからである。そこをワタシは、こういふコトをテイアンしたい。カタカナにヒラカナをキョウジュウゴウさせたらどうであらうか。その1ホウホウは、イジヨウかいてきたごとく、ジュウライ、カタカナでかいていたガイライゴ(コレにはカンゴもふくめる)およびメイシ、メイシソウトウゴをカタカナでかき、タをヒラカナでかくマリカタである。こうすればワカチガキをしなくてもよみやすいし、シメンをおおくつかわずともすむ。カタカナは、カンジの1ブをとったモノで、かたいカンジをあてえ、メガちかちかする。コレにオンナモジたるカンジのソウシヨタイのヘンカしたヒラカナをハイすればやわらかいカンジがさてよみやすい。カタカナをキヌのフィブロインとすれば、ヒラカナはセリシンのごときモノか。また、ドコにナニがかいてあるかをしりたければ、ジュウライどおり、ジュウヨウゴクにはシンセツなサクインをほどこせばよい。またドウオンイギゴの

トリアツカイにこまらぬようにするには、できるだけカンゴをつかわぬように、またまぎらわしいコトバはさけて夕のわかりやすいイイマワシをえらばよく、できるだけママトコトバをつかえばよいのである。

ケツキヨク、カナガキのチヨウシヨは、ツギのごとくまとめられる。

1. カンジにくらべ、ジスウ、ジカクスウがすくないから、はやくマスターできる。
2. はやくかけ、はやくよめるから、ナイヨウバリカイしやすい。
3. ジムノウリツのウエから、コトバのインサツにはできるだけジスウのすくないモノがよい。

ジツにカナガキのホンメイは、3にあるといつてもよく、コレがテツテイされれば、ジムカクメイがおこるのはトウゼンである。

さてそれでは、カンジをカナガキにしたらどれだけのジカンがセツマクできるかをジツシヨウしてみよう。ミギカヒヨウは、カナおよびカンジのジカクスウをしめたものである。カナのナカでは、ダクオン、ハンダクオン、ヨウオン、ハツオンは、それぞれドクリツのモジとし、カンジは、ゲンゴウのトウヨウカンジのみについてまとめられたモノである。このケツカより、カク1ジカヘイケンジカクスウは、

カタカナ 2.87  
 ヒラカナ 2.94  
 カンジ 10.3

とケイサンされ、カンジのジカクスウのおおきいのおどろくであろう。

そこでゲンダイのニツボンジンのかくもつともヒヨウジュンテキなブンシヨウとして、アサヒミンブンのマセツ(2ガツ18ニチズケ)をえらび、このナカにでまくジスウ、カクスウをしらべてみた。ツギのヒヨウからわかるごとく、カンジをカナになおすと、そのカクスウは、 $4507 / 8305 = 0.543$ パイにヘリ、ジスウは

カクスウ	カタカナ	ヒラカナ	カンジ
1	5	11	2
2	27	19	12
3	19	17	30
4	11	9	64
5	7	8	91
6	1	4	106
7			144
8			176
9			172
10			177
11			184
12			187
13			138
14			1011
15			96
16			58
17			35
18			28
19			17
20			12
21			4
22			3

	ジスウ	カクスウ
カンジ	897	8305
ヒラカナ	1322	2932
カタカナ	294	649
キゴウ	213	271
ケイ	2726	12157

	ジスウ	カクスウ
カンジ→カナ	1730	4507
ヒラガナ	1322	<del>2932</del> 3109
カタカナ	294	649
キゴウ	213	271
ケイ	3559	<del>2726</del> 2536

1730 / 897 = 1.93 バイにかえる。ところがアンは、カンジばかりで  
 かないから、イッパンテキには、カクスウは、~~8305~~ / 12157 =  
~~0.702~~ にへり、ジスウは、3559 / 2726 = 1.31 バイにかえること  
 になる。ここで1つのカテイがヒツヨウである。すなわち

「おなじオオキサのジであれば、つまりジをかくマスメのオオキサがひと  
 しければ、そのジのカクスウは、ソレをかくシヨヨウジカンにヒレイシ、そ  
 のジのミヤスサにハンブレイする。」

このカテイにしたがえば、ウエのケツカよりカクスウは、<sup>31.2</sup>~~30~~% だけすくな  
 くなって、これだけはやくブンシヨウがかけることになるが、ジスウが31%  
 おおくなって、これだけシメンをおおくヒツヨウとする。それゆえジのこみ  
 グアイは、~~0.702~~ / 1.31 = 0.5<sup>25</sup>~~37~~ バイにへり、45%イジヨウもみや  
 すくなる。しかしながらシメンにセイゲンがあるバイには、ジのオノキサ  
 31.2 / 1.31 = 0.238 バイにちいさくしなければならぬ。このトキ、  
 ジをかくジカンは、~~0.702~~ × 0.238 = 0.166 バイにへり、ジのこみグ  
 アイは、~~0.702~~ バイになる。ケツキヨク <sup>0.688</sup> = 0.525

こみグアイ <sup>0.688</sup> シヨヨウジカン  
 シメンにセイゲンのないトキ 0.5<sup>25</sup> バイ ~~0.702~~ バイ  
 シメンにセイゲンのあるトキ ~~0.702~~ バイ ~~0.583~~ バイ

になるといえる。いずれにしてもカンジをつかわずカナガキのみにしたホウ  
 だ。ジカンはセツマクでき、みやすくなり、ひいては、リカイしやすくなる  
 こゝがわかる。まさにカナは、ゲンダイジンのセンスにピッタリとマッチし  
 てミジといえよう。なおひとつおおくのデータをとりたかったが、タイヘン  
 なシゴトになるのでモンガイカンは、このテイドしかできなかった。ミナ  
 ん、カンジをやめてカナガキをジッゴウしようではありませんか。

'60. 2. 25



ゲンハクダクベカラズ  
「玄不可折」

浜村 保次

私は近頃、世の中の全ての事が矛盾した色々のものが調和して成立しているのびとしきりに感じるのである。自然の美しさも、人間社会の調和も又個々人の人格も。而してこの調和が乱れるときに向題が起る。

今年の新入生への挨拶の時に私は学向をするときは徹底して疑問をなげかけ、徹底してこれの解決をはかると言う積極面と同時に、何でも受け入れられる軟かい素直な心の二つが同時に兼ねそなわるよう努力せねば大成しない事を話したが、キリストは既に鳩の如くやさしく蛇の如くさとかれと説いている。いくら頭がよくて仕事をして、ものにこだわって心がかたくなであることは仕事も結局大きく延びないし人間として不幸である。又鳩の如くやさしいだけでも困るのである。

社会的な事であると大成しないとか困るとかの問題をはなれて人類の不幸と言う問題が出て来る。例えば人間の生涯は複雑で一人の人格を考えて見ても個人的、博愛的、資本家的、共産的、或は惨忍性と愛など種々雑多なものが共存して一個の人格をつくっている。これ等の人々が社会をつくった場合、夫々のニュアンスが自然に出て来るのは当然で又夫れ等は各々長所も短所もある事、これも当然である。これをこれではなくてはど力もだけならまだしも、それを押しつけていつては戦争も止む事がないであろう。全て矛盾の調和と親じ矛盾を調和さす努力をするところに平和があると思う。現代の社会は余りに末端に促われて自然の根求を皆忘れていような気がする。

広瀬淡窓先生が玄は折く可からず。折く可きものは玄に非ずと名言を残されている。真理は分析したらいけないもので分析したらもうそのものは真理ではなくなるという意味である。又其の後にしかし真理も分析して見なければ分析したらいけないものだと言う事がわからないと嘆じていられる。

現代の人類は今真理を分析している最中で、分析した一部を捉えて、これが真理だ、それは不正だなどと論議の段階にあるものと思われる。だからそこにはげしい論争があつてもいいが、しかしなんと言っても自然の真の姿が矛盾の調和にあるのだと言う事に早く見覺めてなんとかもう少し大局から物を見、自然の調和の完成へ一歩ふみ出してほしいものである。

# 校閲誌の存在意義

4回生 荒瀬治夫

校閲誌“Chain”は単なる娯楽趣味の文芸雑誌ではない。これまでの校閲誌に於いて、一部ひやかし半分の娯楽作品が掲載されたことがあつたのは横惑に思う。しかし何とか創刊号からアク号まで発刊されるに至りこの辺でもう一度校閲誌の存在意義を考えてみよう。

今までの校閲誌に於いてその存在価値は充分にあつたと確信する。それはひと口に言うと、“繊維化学科全体としての話し合いの場を提供して来た。”という事実である。おそらく現在の繊維化学科に於いて、先生方や学生の全体としての話し合いの場は、校閲誌を除いて他にない様に見える。何故、全体としての話し合いの場が必要であろうか。我々は次の様な問題に直面したことはないか。

たとえばある一人の学生がひとつの建設的な意見を招いたとする。それが実現すれば、我々にとって大きな利益をもたらすであろう事柄であつたとする。しかし、彼は“何も、俺がそんなこと言い出さなくたっていいじゃないか。土台一人で出来やしない。”と考えてしまい、その結果内面にくすぶ(くすぶ)、しまいには、借しくも消えてしまう。何故か、現実の学園生活の複雑な条件のもとにあつて、一人のエネルギーは余りにも小さいからである。だが結集されると、エネルギーは大きな作用を及ぼす。この一人一人のエネルギーが結集されるべききっかけ、又は、足がかりを与えるために、校閲誌“Chain”は存在する。

“Chain”に投稿し、意見を交換しあい、相互理解を深めることによって、必ず内面にくすぶっているものを吐露し、他に働きかけることが出来、又自分と全く同じ考えの者を見出し、強い立場に立つことが出来る。

以上の様に、我々繊維化学科生が、共通の話し合いの場をもち、お互いをよく理解し、繊維化学科の発展のために個々のエネルギーを結集するべききっかけをつくること、校閲誌の才の存在意義である。

# 新入生諸君へ

4回生 荒谷 善夫

もう一月以上も前になりますが、例年通り、18号室に於て、諸君達新入生を歓迎する意味の集まりがあり、僕も途中から出席しました。その時、新入生諸君の自己紹介で、「私は昭和18年生れです」と言って立った人が居て、僕は、少々驚きました。昭和18年と言いましても、僕の生れたのが昭和14年ですから、勿論、それ程の年令の差はないのですが、何故か、諸君が、ずっと若く見えたのは、我々の記憶の出発点が、丁度、昭和18年頃からであったからなのかもしれません。こんなことを書くと、諸君は、「お前は如何にも我々に対して、大人振っている」と思われるかもしれませんが、そんな事はないのであり、僕はむしろ、諸君から、子供あつかいにされたいぐらいなのです。ただ、過ぎ去った3年間の学生生活の様々の感慨が、僕にそう思わせるのです。言いかえれば、この3年間の様々の生活が、現在の僕に、極めて大きな影響を与えたと言うことでして、諸君も、恐らく、3年後4年後には、この様な感慨に付けられるだろうと思います。

僕は、この青春生活の数ページを振り返ってみて、反情の問題の重要さを増々知りました。過去3年間の大学生活で、これと言って何も得なかった僕ですが、友達だけには非常に恵まれ、彼等の、美しい、魅力ある心の一端に触れて感激し、生きていることはこんなに楽しいものかと、しみじみ思つたものです。今も思い出しますが、痛々しいがしかし美しい悩みを告白し、その内面生活の記録たる日記をすっかり見せてくれた友と、一晚中語りあつた。僕は、勿論、彼の悩みをどうすることも出来なかったが、互に信じ合つたあの時の感激は、僕の青春の時代に於ける至高の体験となるだろうと思います。又、或る時は、山で直に迷い、雪の上にテントを張って、寒さの為にねむられず、互に勇氣づけ合つて、おきていた時のこと、大雪山連峰の一つに立つて眺めた日の出のすばらしかったこと。あるいは又、寒い夜、室石を散りばめた様な京都の夜景を眼下に眺めて、語り合つた時のことなど、これらすべては、友の存在によって、一層意義づけられたと思います。

僕達の大学では、40余人のクラスメート以外、ほとんど、他人と接するチャンスは、与えられませんが、しかし、一方、これ程、友を得るに恵まれた

ところはないと思います。

諸君のクラスの40余人は、全くの偶然によって、一つのグループを作りました。ですから、そこから生じる友情も勿論、偶然の産物であることは、他の多くの争がそうである様に、事実であります。しかし、こんな風にして邂逅した人間が、豊かな可能性をもっていて、それが認められたと言うただそれだけの理由から、友情の芽が吹き出す場合が、しばしばあるものです。最も強烈な、最も純粋な恋愛は、又最も突発的なものであると言われますが、この点では友情も同様だと思えます。ただ、友情の場合は、恋愛に比べて、互いふれあいの祭化が、はるかに緩慢であるのだと思えます。ですから、未だ芽のうち、大雨でも降れば、たちまち、その芽は流れ去ってしまう危険なものであるのです。従って友情の芽が、すくすくと育ち、最初の共感より確実なものにする為には、一種の拘束を受けることが必要になって来るのではないかと思います。即ち、相手の偉大な魂、崇高な精神、魅力ある心の存在を信じ、それを飽くことなく探し求め、未だ発見する前に、彼を愛していることから来る幸福な拘束が必要だと思ふのです。

かくして、恋愛に於て、「一目ぼれ」で始まる様な出発の仕方を友情もとるのだと思えます。元来、恋愛は、どちらかと言えば、感情的なもの、友情は精神的なものと言われますが、友情にも、恋愛の感情が必要であり、恋愛にも、友情の精神が必要であると僕は思います。話がすこし、脇道にそれますが、結局、誠実さの故に、時には共感し、時には衝突し、高い才能の他に愛すべき弱点を併せもった様な者達の間に、友情は祭まつて行くのでしよう。

諸君は、人生の華<sup>ハナ</sup>と言われる青年の一時期を、本学科の、そのクラスで過ごされることになった。恐らく、愛すべき若者の喜怒哀楽に満ちた発酵としたクラスであろうと思えます。そして、その故に、友情と恋愛のジレンマに迷ひだらう諸君も、或はあるかもしれません。そんな時、魅力あるその二人の恋人が、諸君の万末の拍手を以って祝福されるかもしれない。そんなクラスであってほしいと思えます。

つまらないことを、ごたごた書きましたが、とに角、若くして友情を覚えることは、人生の至福だろうと思えます。

話は変わりますが、最近、僕は学長にお会い出来る光栄に浴しました。その時、学長は、大学に於て学生が先が身につけなければならないことは、健康であり、次に正しい判断力であり、三番目は専攻の知識であるという意味のことを言われた。勿論、専攻の知識の吸収をおろそかにせよと言われたので

はないと思います。前二者の前提が将来、専門の分野に生きる為の必須条件だということを書かれたのだと思います。

さいわい、諸君には、これから二年間の教養科目を受ける機会があります。勿論、大学の講義だけでは十分なものではないにしても、このチャンスを利用して、深い教養を身につけ、若き日の淘汰に、青年らしい生きがいを感じていただきたいと思います。

又、出来るば、休暇を利用して、大いに旅行し、諸君自身の目を以って、日本という国を真に理解していただきたいと思います。

諸君の中には、京都以外の土地からの出身者が多く居られると思います。諸君が、これからの4年間を送られる京都の街は、山紫水明の淡いヴェールの中に、多くの名所旧跡を含み、静かな落ち着いた雰囲気は、諸君を魅了することでしょう。勉強に疲れた時などは、この京都の味を十分に味わって下さい。(日曜日なら、よめこんで、ご案内致します。)

学長も言われた様に、健康は幸福の源泉であることは言うまでもありません。諸君は、長かった受験勉強ですり減らした身体を、これから取り返さなければならぬでしょう。それには、やはり何かスポーツを楽しむのが良いと思います。その一つとして、僕は登山を奨めたいと思います。重いリュックを背負って汗を流す諸君に、山の冷たい清い空気は、さっと輝やかなしい健康を約束するでしょう。そして山で得た友情や忍耐力は、生涯、諸君の良き伴侶となるだろうと思います。

諸君は将来、化学者となって、科学技術の発展に寄与せんと目ざしておられると思います。その為には、猛烈なファイティング・スピリットを持つて勉強しなければならないと思います。科学というものは、人間の真摯な努力を傾ける対象として最も価値あるものの一つでしょうし、又そうであると信じたいと思います。人間の努力の無限の可能性を若き日に感ずることは、老いてなお衰えないであろう精熱の火を、今点火することなのだと思います。そして、これは結局、深く深く人間を愛することを要請しているのだと思います。

大変とりとめもないことを書いてしまいました。どうか諸君は、燃える様な正義感を失わず生きて下さい。そして僕達と共に、真の若き世代のモラルを作りあげて行こうではありませんか。

最後に、僕の好きなゲーテの詩を書いておきます。

空気と光と、そして友だちの愛

これだけが残っていれば、気を落すことはない。

＝ ゲーテ ＝

# 落書き

4回生 海野 悟

寮生活も三年になる。三年にもなると落着いてくる。落着いたところで部屋を見回すと壁にこんな事が書いてあった。

〔寮パチンコ、寮酒、寮煙、寮女〕

一体落書きなどは、読まれることを意識して書かれるものだが、これらの言葉は全て、ある程度までの経験者の手になるいつわらざる気持だと思う。幸かこれを読んででは良心の存在を確かめ、確かめするのである。ただそれだけで殆んど完全に止める事はないが、いじらしい。つまりこれらの縁のないような聖人は寮にも縁がない。良心の告白が次にある。

〔私は馬鹿でした、火の用心。パチンコで人生をめっちゃめっちゃにしてみました。〕

火の用心だけは別の時のものだろうが、並べて書いてあるところが愉快だ。深刻なのがある。

〔パチンコの厭になった理由；今日悪質な反人間的な社会組織の中で、何か意義のある行為をする目当てを失った一般大衆が、その無益に生きる時間をめの子供じみたトバク行為の反復によって空費している姿は何とも言えず悲しい事であり、且つソラ悲しい事であると思う。〕（原文のまま）

子供じみたトバク行為の反復ではあるが授業料を払ったのが後悔されるような授業時間の合同に授業料ぐらい取返し得るとすれば、何とも有益で、且つ意味ある事であろう。もし勝って帰っておれば、こうなったに及がない。下手は商売でやっているんだと気づくまでは、寮パチンコが、トッパに書かれることになる。

この横に、〔努力〕と大書してある。仲々の産筆である。寮にあつて、勉強に〔努力〕するのは、試験前だけとっていいと思うが、この試験前には、反射的に、めたら遊びたくなる。一人ならともかく教壇できようが、教人もせろうと、多数決なる民主主義の原則がたのまら机を麻雀卓やパチンコ台とすり代えて、〔寮生に限り、ハンデイキマツプを認めるべし〕と勝手な抗議をさせ、そのはては、分担受持制カンニング遂行に進展させるのである。

純々であるが、読めなくなっているのもある。

〔若人の恋愛は、プロメシウスの炬火であるべきはずだ〕

〔我々が、愛などと思っているものは、或る人間の姿と形を独占したいと思つてエゴの醜悪なるものに外ならぬ〕

ともかく傾聴しましょう。あまり力むと、高血圧になるぜ。

〔恋愛に於ける貞節とは、激情の急階段にすぎぬ〕

恋愛年令ノクオカ？

〔女女女女……………〕

又3個ある。最初の方は丁寧に、後になる程乱暴になる。こいつの奥さんになる人は災難だ。

〔次の世界で、苦しみというものがあるなら、私はもう少しこの世界で苦しんで死にたい〕

この寮で有難いのは、部屋も食事も、この下があるまいと思われぬことである。どこへ行っても、食と住に閉じて、失望したりする心配はずない。どうもこれが善かれたのは、寮が建てられて向がない頃らしい。〔もう少し〕余裕があるのだから。

そこここに麻雀の記録表が書いてある。寮生活と麻雀は切り離せない。考えるに、度をすごさなければ、その経済的なこと、退屈せずに時を返せるなど、余暇の最善用とはいいすぎか。各自の性格が、巧まずして表れ、初対面でも共に麻雀を遊ぶと、以後気象につきあえるようだ。よく見ると、三代程前の部屋の主が、全て勝っている。更によく見て、消して書き直しのあるのを確かめた。

落書きを読んでいると、昔いた人物が容易に想像できる。それは横自身でもあるし、隣の部屋の連中でもある。同じ生活を送った者だけの認識かもしれないが、書いた人の体臭が感じられて、心温まる。この部屋の歴史の先輩が、そうであったように、僕もこの部屋の中から何かを得て、何かを残していくものと信じる。

一通り見回してふと気がついた。隅の方に小さく落書きしてある。曰く「落書きするな！」

おわり

落書とは

空間恐怖性のなせる業なり — Toyomoto —

# 眠れないままに

眠れないままに、天井を見ている  
と、いろんな事が頭に浮かぶ……

## 2回生 堀江 宏

新入生に与える ……頼りない上級生の一人より

### 1. よく遊びよく遊べ

この言葉はこの学校へ入学して以来何度も聞かれました。入学以来  
ヶ月余り、皆さんも大学の空気に慣れたことでしょう。“日本の大学は入  
るのは難しく、出るのは易しい”という言葉の意味も理解できたと思います。  
2回生の時から勉強に苦しむ必要はありません。マージマン・パチンコ・ダ  
ンス etc. 遊ぶことは皆さんを待っています。でも悔いのない遊び方をし  
て下さい。何事にも限度があることをお忘れなく。

### 2. よく学びよく学べ

この言葉はあまり聞きなれないと思います。私も言うのは初めてです。私  
も言いづらいたのですが、皆さんのために言っておかねばならないのです。

大学は勉強するところです。専門的知識を全部教えてもらうところではあ  
りません。自分で勉強するところです。ある程度教わって自分で研究するの  
です。自分で勉強しないと後で非常に困ります。これは私の経験から割出し  
たものです。だけど一日中机の前に座っているのは馬鹿げたことです。適当  
に遊びなさい。何事にも限度があることを忘れないように。悪い頭に無理して  
つめこんでも無駄です。オット失礼。

### 3. 上級生を同級生と思え。

こう言っても上級生を同級生と同じように扱えというのではありません。  
2級生は上級生として尊敬しなければいけません。ただ、悩みごと、勉強の  
こと、その他いろいろ皆さんの小さな胸が一杯になるようなことを上級生に  
気軽に相談しかけよということです。少くとも上級生は皆さんより人生のこ  
とについては経験豊富です。きっとよい答え、又解決へのヒントを与えて  
くれるでしょう。人生は全て経験です。

### 4. 何かクラブに入部せよ。

小、中、高校を順当に卒業してこられた人、又途中直ぐさをしてこられた  
人も、大学に入ってほっとされたことでしょう。そこでこの4年間で順当に  
行けば)を有意義に過ごそうと思っておられることと思います。そのような人



ほどこかのクラブへ入部しなさい。まだ入っていない人はぜひとも入りなさい。年間勉強するばかりが能じゃありません。学生々活はこれで最後です。(但し大学院は除く)皆さん、幼ない頃からの記憶をずっとたどってごらんなさい。小学校の頃は本当にたわいのないことを友達と真面目に話合ったでしょう。中学校の頃は空想じみたことです。高校はすばらしく理想的なことを話合ったでしょう。そして今、大学に入って理想がかった現実的なことを話合う機会を持ちたいと思うでしょう。クラブに入って部員といろいろ話合いなさい。苦しい事、悲しい事、愉快な事を。話合うことは人間を作ります。皆さんはきっと今より完成された紳士淑女になれるにちがひありません。

#### 5. プライドを持つ

皆さんの中には、この大学に入りたくって仕方ないから来たという人は、まづいないと思います。京大・阪大を校門だけしかくぐれなかったから仕方なしに来たという人ばかりだと思えます。そして二期校だというコンプレックスに悩んでいる人もまだいると思います。その人は不幸です。この大学のよさがまだわかってはいないからです。私も去年はそうでした。京大生と肩を並べて歩くのは恥かしい気がしました。でも1ヶ月も経つと平気になりました。この大学に来てよかったと心から思うようになりました。もちろん、今でも思っています。どのような点がよいのかといわれても何とも言えません。説明できませんが、とにかくよい大学です。皆さんもいづれわかると思います。そして来年、新入生に私と同じようなことを言う人が現われると思います。

又、皆さんの中で、この学校は悪気力な学校だと思われた人も少なくないと思えます。又、最初の日に学生運動禁止の御告を聞かれて驚かれた人も多いでしょう。私達の時もそうでした。若くない、背の高くない、頭髪の多くない、あまり元気のなさそうな先生が、聞きとりにくい声でぶつぶつとその話をされた時、私達は驚いたものです。若先生は私達のことを考えて言っただけなのでしょうが、私達の考えとは全く違っていました。このような違いがどうして現われたのか、時代のずれか、年令のずれかは、しかと言うことは致しかねます。

去年の安塚閉争の時、私も有志として3・4回デモに参加しました。デモに参加したことを「馬鹿なことをする奴等だ」と笑っていた人もいたでしょうが。私はいともたつてもいられなかったのです。安塚条約の有効期間、あと9年の間に墓場へ行くかもしれない人達と、青年期をその時期に過ごそうとする者とは、安塚に対する反応は違ふのは決っていたのです。だけども多く

の頑固な頭はそれを考えることを許さなかったのです。それでも私はデモに行きました。今でも後悔はしていません。

1回生の皆さん、この学校が無気力だと思っておられる皆さん、私達はこの無気力さに犠牲になりかけています。でもやるべきことはやってきました。これにあげたのは一つの例です。た少し足りないものがあるだけです。それを皆さんの力で補って下さい。フレッシュマンの熱意と新鮮な息吹きです。それこそこの怠慢なる上級生の骨の髄まで透み通して下さい。

新入生歓迎コンパに廻る。

一月24日、新入生歓迎コンパがあった。新入生の神妙な顔、顔、顔、それと対照的な在校生の「また飲めるぞ」といったうれしそうな顔、顔、顔、昨ま（私が1回生の時）より楽しいフンイキだったことは疑えない。ただ新入生は全員出席しなかったこと、3、4回生が殆んど欠席したことが残念であった。

新入生歓迎コンパは何のために催されるのか？常日頃のウツフンを晴らすののではないし、ビールを飲んでさわぐためでもない。新入生に大学の空気こ早く慣れってもらうため、在校生との縦のつながりを増すために催されるのさと思う。歓迎コンパは2回生が、追出しコンパは3回生が主催するということは伝統的になっているが、だからといって歓迎コンパに3、4回生が出席しなくともよいという規則はない筈だ。3、4回生諸子は実験その他で多忙だということはわかってはいるが、その忙しい実験の合間にひまを見つけて出席してくれた3回生の諸子もいたとひいうことを御存知あるか？また欠席したから（出席する気がなかったから）会費を払わないという諸子には全くおきれてものもいえない。こんな上級生を持った私達下級生は----と嘆きたくさるのも無理からぬことだ。本校には縦のつながりが弱いからそれを強くするためには云々----と言っている諸子はソッセンして出席すべきだと思う。2級生諸子にお願いする。もう一度歓迎コンパの意義について真面目に考えて下さい。

明日に希望を、常に余裕を

「私は明日を信じて生きている。」と言ったら、「あなたはロマンチストだ。」と笑われたが、ロマンチストと言われたっていいじゃないか、私なんつともかまわない。昨日は今日のために、今日は明日をよりよくしていくために努力するんだ。今日為したことが明日のために何らかの形で働きか

け、明日をよりよくする要素となるであろうと信じるのだ。

「明日はどうなるかわからない、だから今日に全力を尽さねばならないのだ。」と私の友は言う。だけど私は反対だ。そりゃ人生一寸先は闇だが、だから悔いのないように今日に全力を尽すというのはどうかと思う。こんな例え話がある。グライダーは周知の如くエンジンが無い。だから自力で飛ぶことは出来ないからロープで引張ってもらって飛上る。最初はグングン上昇するが最高点で失速する。そうなったらどうなる？墜落するだけだ。ところが上昇力の80%位を上昇に使い、そこで鋭角を水平にもどして下降に移るんだ。そうすれば、上昇力の20%と下降の加速度とがプラスされてスムーズに着陸できる。これは人生の全てのことにあてはまると思う。恋愛・結婚・短くは一日一日の生活、長くは一生涯とに關して。今日のエネルギーを全部消費しないで、80%を費し、残りの20%は明日のため又非常事態のために残しておく。明日は又明日のエネルギーの80%を使う。結局は前日のとど100%になるのであるが、その日のエネルギーをその日のために全部費すというような余裕のない生活をするよりも、常に一日の20%のエネルギーのスペアがある余裕たっぷりの生活をしたいものだ。絶望の淵につき落された人も、泣ける向は立直ることができるが、泣くことができなくなったら再起できない、というではないか。

なんだか話が混乱したようだが、私の言わんとしていることは解つていただけますか？私もこの問題について誰かと議論してみたいのです。私の考えはまだ矛盾だらけですが、奴の考えを訂正してやろうと思われる方、このような人生問題について議論してみたいと思われる方は又回生の塩江まで申出て下さい。

#### ある男の弁

私はフェミニストと自称する者です。女性に親切であること——これが私の信条です。だけどただ盲目的に女性に親切であるという訳ではありません。時には女性に不親切であることもあります。自分の感情を害されてまで、女性に親切になりたいとは思いません。だから人は私をフェミニストと言わないのかも知れません。

私は只今女性の心理を研究中です。本や新聞その他あらゆる参考書を読みテレビ・映画を見て、又実際に交際したりして研究をしていますが、いまだはっきりわかりません。ただわかったことは、こと恋愛に關しては——最も関心深い問題である——男性の出方を待っているということ。積極的に出

ればこれぞと思う女のハートを射止めることは容易なことである。ただし、誠意をもって対応しなければならぬことは言うまでもない。こんなことは誰でも知っていると言うかも知れないが、私もこのことを理論的に知ってはいたが、これを経験的に知ったのは最近のことである。積極的になるにも、女性と話すきっかけがなくではならぬ。そのきっかけを見つけるのが難しいのだ。案外多くあるのだが、注意していないと見過しやすすいものである。だからといってこじつけがましいきっかけを作るのはよくない。自然なきっかけが大事なのである。

「どうしたら女友達ができるか？」とよく尋ねられる。そんな時私はいつも言う。「目星を付けた女性に話しかけられるような自然なきっかけを見付けることだ。例えば君が電車で通学しているとする。いつも乗る電車にいつも乗っている女性が一人くらいいるものだ。その女性と友達になりたいのなら、まず最初の一週間か10日間程彼女の傍に立つんだ。彼女がどの駅で降りるかどわかるし、一週間もすれば彼女も君の顔覚えるだろう。それから勝負なのだ。彼女が自分の顔を覚えたとわかったら、彼女が電車を降りる時に『さよなら』と言うんだ。まあ返事はしないだろう。そして次の日、電車で彼女と会った時、彼女が微笑んだり、君の挨拶に答えたりしたら、君は99%彼女と友達になれたんだ。もし不幸にして何の反応もなかったら諦めるより仕方ない。それから一ヶ月くらいは電車で顔を会わす程度にしておき、それからデートにでも誘えばいいんだ。」と。

それから女性はほめられることを喜ぶ。「君は美しい。」という言葉は女性を喜ばせはするが、もっと細かいこと、例えば「爪が美しい」とか「目がきれいだ」とか「髪がすてきだ」とかという言葉の方が女性は喜ぶものだと思う。ある時経験したことだが、アルバイトしていた時知り合いになった女性に「私がアルバイトして金を得たことは収穫の一つだが、君と知り合いになったことも一つの収穫だ。」と言ったら、「そんなこと言われたら女って非常に喜ぶわ。」と彼女は言った。まあ、女の言ったことだから間違いはないと思う。皆さんも試してみたらどうですか？「合宿へ来た収穫は……」  
「この4年間学バへ通って得たことは……」

男性諸君に何かの役に立てば幸いです。

女性諸君、男性においてもまた然りです。応用して下さい。

女性に親切であること——これが私の信条です。

# 最後の手紙

4回生 宮内博一

格	若	。	こ	不	来		空	ら	あ	そ
率	一		不	断	す	私	の			

苦しみに耐えて生きなければならぬ。運命は結局のところ敗北以外の何物でもないから。無数の過誤を犯しながら、君いようのない至しさにかまわず、崇高な目的を追い求めなければならぬ。自分の追い求めているものの姿を、ほんの一部分さえも見る事が出来ずに、しかも誠実な態度で追い求めなければならぬ。自分の格率を無限に進歩させ、不断に進もうとする傾向を確保しなければならぬ。しかし人間の行為はいつも我々の高貴な魂に失敗の憂き目を見せつける。間断なく失敗を重ね、徹底的に無能力を思い知らされた時、しばしの間立ち帰り、改めて手さぐりの生活を続ける活力と希望を与えてくれる、そんな魂の故郷が必要だったんだ。

君が私に望むものは、身動き出来ない重さで私を押えつける。私が君に何かを与えることが出来るくらいなら、私は君に何も望むものはない。何も与える事は出来ないからこそ君に何かを期待したんだ。私は自分が一体どちらを向いているのかを知らない。私は自分が何を望んでいるのかを知らない。正義？いやむしろ橋善だろう。真理？いや、一瞬の快楽の方を喜ぶんだ。唯そんな状態に満足せず、泥沼から這い出ようとする意気だけは持っているという、それだけをせめてのなぐさめに生きているんだ。そんな私には、自分のことだけしか観察し見つめる余猶はなかった。そろしてそんな観察から導き出すものは、消極的な結論だけで、積極的な指示を探し出すことは出来なかった。いかに生きることが、有限な時間と力しか持たないものにとって最高の生き方であるのかを確信するには、私は若すぎるだろう。未熟な経験を、先人のそれによって補おうとしても、余り違いすぎる能力の差をうずめることは出来ないし、社会的環境にも大きな変化があった。だから同じ社会に生き同じ世代に居る君に私の経験を補うものを見出したかった。独立した経済生活を営み、社会に出ている君に、私の生活態度を肯定してもらいたかったんだ。しかし君は肯定するどころか私の甘さを思い知らされた。そんな君が望むものは現実の社会に善にならない一員、敢えて言うなら有益な一員になることだ。だめだ、どう考えてもそれで満足出来るとは思えない。

何かもっと外にある筈だ。分っているよ、こんな時は時間が解決すると言うだろう。そんなに時間をかけなくても、三本立の映画に満足せずロードショーを観る為に、麦めしに満足せず白米を食うために、鯨ではなく牛を食うために、二十四時間を費すようになるだろう、しかし先のことを言うのは止めよう。誰だって自分の未来に確信は持てないんだ。問題なのは現実の自分に満足出来ず、しかもそこから抜け出せないことなんだ。酒を飲んでも胸につまみ、しかし飲んで駄弁るのは楽しい。週刊誌の工口話は馬鹿げていると云う、しかし読みたくなとは思えない。勝負に加わるために有益な書籍を買わなかったり、一体君の望む有益な人間というのは、この私と質的に違った人間なのだろうか？ 程度の上でだけ相違を認められる。そんな人間のことでないのか。

私は全然耳を貸さないと云っている時だけしか他人に対して言うことは出来ない。聞かれることを期待しては何か話すことは出来ないんだ。

しかし私の中の例の偽善者はいう。お前はそれがどれだけ長くどれだけ強くお前を喜ばすかではなく、そんな条件を除いて、お前はどうすべきであると考えているかに従い行為せよと。よし実行しよう。ヒルティに従って。

例えば馬鹿な話はしないでおこうというのは消極的で、馬鹿な話をすれば失敗感を味う。しかし例え小さなことでも何かをしようとする場合、一回でも実行出来れば満足感が得られるというのである。それでまず簡単に実行し、実行されそうなを送る。よし朝六時に起ることしよう。そうすれば学校には遅れないし、本を読む時間も出来る。カントでも読んでみよう。

だがさてよ。朝六時に起きてカントを読む事にそんなに意味があるのだろうか。何が意味のあることで何が無意味なことなのかはやはり分らないことなんだ。昨日の自分と今日の自分に違った意味を見出せるような事というのはどんなことなんだろう等と考えている内に相変わらず生活が続く。そうなんだ。え、かっこういうだけで半人前以下の事だけしか実際には出来ないんだ。

お互いの向上の為にとか、経験を分かち合う為にとか、もっともらしいこと云々云々、君とのつき合いで私を引きつけていたのは、防音や喫茶店の雰囲気や、夜の散歩だけだったかも知れない。そして君は言った。「真面目な人が好き」だ。私のどこがマジメなんだ、君の前では大いに真面目振って見えたけど、いつも済まないと思っていたんだ。真面目ブルだけではなく本気で真面目になれなかったのは、心のどこかで謂ゆる真面目ということに反発するものがあつたからだろう。負け惜みからだけではないと思うよ。

しかし君の望むものは私には重荷だ。もうブルのは苦痛なんだ。君にとって

も寄り道になるだけだろう。だから意味のないつき合いはやめにしよう。いくらあせって名目ばかり探しても、所詮は失望の根を掘り当てるだけだろうから。

しかし、今私が慰み出すことは、楽しかった事ばかりだよ。決して後悔はしていない。同じ大阪の空の下に暮らしていれば、逢う事もあるだろう。そのときは、親しい友人として笑って話がしたいものだね。

## 車中思

—— 四国の旅から、価値について ——

3回生 喜多 敏夫

三月の末、苦心参胆して四国へ旅出た。陽春うらうらと、梅花咲乱れ、芽分甚と爽快であった。少くとも毎度見なれた四十人の美男美母(?)から逃れられただけでも偉せであった。但し懷中を除いては——

車中遠く塩田を眺め、近くにかん畑をみつつ、妄想にふけてみた。

旅に出ることの楽しさの一つは“自分の環境から逃れ、気のおもむくままに気、聞き、言い、食うこと”である。環境からの自由な解放に旅の面白味があるわけだ。我々もこの法則を遵守する為、少し“タガ”をゆるめることにした。是非四国のお国諺を聞くよう、機会を捕え人に声をかけてみることにした。できれば若くして美しい女性に!

さき物色してみると、様々なポーズをした、様々な色の種族が、そこそこ群棲していた。“チラッ”とこちらへ目を流すもの、知らん顔して何こうをむくもの、中には他に人間もいるのに、我々が来るのを待つ、

“カメラのシャッターおしていただけませんか?”等いうもの、千差万別であった。この時フト奇妙な妄想にかられた。以下御披露する。

ここに不思議な数学がある。 $100:100$ キ $1:1$ がこれである。何故キにはなるか説明しよう。今100人の男と100人の女をいたとする。しかるべき守回の後、陰陽の関係が妨ぎ、青葉アルコールに激され、100人:100人即ち1人:1人となり万事OK!だがそういう訳にはいかないのである。何故なら無差別に選ばれた100人の女性中、5人内外のものに100人の男共の目が集まり、95人の残りは空しく流されるのみであるから——という実説がある。だから数学は $100:100=5:100=95:0$ が正解ということになる。それ故20人程が集まると5人に当る部分0となる場合があるのも必然

的にしかたがない事になる。

何はともあれ、ここでは5人を100人中より送ぐという操作を必要とする。ある価値表によって我々は区分しなければならないのである。しからば、価値の規準は何か？ “美しい順に並べる” 結構である。“賢い順にする” 大いに結構である。“美しく賢い順にするさ” これ又大いに結構である。“気さとのやさしいのかわいい” “お金持にこしたことはないな” “明るくって世話好きなのもいいね” 申し分なし誠に御同慶の至りである。しかし美人必ずしも才女とは限らない。この場合はどうするか？ しかたがない。では才女をとりましょう。白痴美はいくらでもありませんからな！ “よろしい。では又言ふ才女でも頭の切れる人と、教養の深い人とがいるがこの時は？ *Intellect* と *Cultivate* とは違うからね。” “じゃあ頭のいい人を取りましょう” 成程言の考えによると智性が最上位というわけだ

ではなぜ智性が他の徳性より上位になるのか。価値に上下の区分が出来るのは何に一体よっているといえるのか？ 又或者にとって価値あるものが他の者にとって価値がないのは何によっているのか？ この相違は如何にして生まれたのか？ それは理性によるのだ。本当に知性あり、理性あるものなら、こう答えるにちがいない。“と貴君はどうかも知れない。しかし他方もそう答えるだろう。では理性のどちらが正しいのか。しかしその判断は下されようがない。逆にいえば、理性の段階では解決にはならないといわなければならないのだ。むしろ我々はここではその理性をかく形造ったものの根柢を探さなければならないわけだ。理性のオブラートの中身を見なければならぬ。まず意識の世界へ上ってこない下意識の世界を探らなければならないのである。

では一体価値とは何か。それが真であり、善であり、美であり、富であり愛であっても、それらは等しく我々に快感を与えてくれるものであることには疑はないのである。或いは又それらが我々の持っている性とか食とかいった生物本能、又は原始的欲求の権勢欲や人間の特色である知に対する欲求等まで取り下げなければならないかもしれない。しかしともあれ、それがいざいざ一采たにせよ、我々にある種の快感を具っていることは否めない。寧ろあるかと思う。かつ快感に対して人間を含むあらゆる生物は、迎合することも又争えない事実である。虚い意味において、我々は不快を避け、快を愛する物体なのである。ここにおいて我々人間は快を求める物体であり、価値あるものは快感を与えるものである以上は、我々は快感を与えるものに価値をおいたのだと考えて誤りはないように思われる。価値とは快感の代名詞な



のである。前述の事承認されがたいかもしれないが、していただいで議論を続けよう。

しかし我々に等しく快意を与える価値あるものに何故差別がついたのであろうか。同じ論法により、強く快意を与えるものは、大きな価値をもち、弱い快意を与えるものは、より小さな価値をもつのである、といえる。

では一体この強弱はいずこより来るのか？

これはその人間の人生行路の過程で造り出されたものであろう。そこにその人間の性格と環境が大きな作用をしているのを認めることができるのではないだろうか？ “美”が彼女に快意を与える為には、彼女は美しくなければならぬ。何故ならばそうあつてこそ美ゆえの称讃を彼女は受けることができるのだから。“富”の価値を高揚するものは彼が金持であることを告白していることになる。快意を買う金を貪しいものは持たないのだから。

又この結果より“金”の為にのみ働き、求める為に魂を売る人が案外金持（又は金持であつた）に多いという皮肉もうなずけるし、又、整形手術や美顔手術をするのは不美人ではなく十人並以上の美人に多いというのも又うなずけるのではないだろうか。

ここで今一度彼女等の方へ目を転ずることにしよう。我々の方を迎合しようとするか否かは、彼女等の価値判断によつていのである。即ち異性と話合ふことが、彼女等に快意を与えるや否やが彼女等の行動を矯正しているのである。しかし彼女等へ問えば、かく答えるかも知れない。

“同性以外と話することは、自分達には違つた面を知り、自分の人生観を固める上で役立つから。”であると。

又同じように、我々を迎合する女性は、そういった機会に恵まれることが少いからではなく、多い女性であるのも又やむえまい。快意を与えたことが次の行動を促し、又それが快意を与えるからである。けれども少くなくとも100人中50人以上はそういったことに徳病な大和撫子であるに違いない。平凡でやさしく、特別に美しくもない人……

いつのまにか前の座席の美人もいなくなつていた。トンネル又トンネルとひっきりなしに変る窓の光景を、ボンマリと眺めながら考えをすすめてみた。青は空の上高く、銀糸は河底の瀬を走つていた。

我々の或者は或事に対して価値を与えるが、他の者は与えないのはどんな理由によるのか？

それに対しとえその為にのみ動かないとしても、或事に対して我々が一般的に価値を与えるのは何故か？

両者の相異はいずれより采たのであろうか？ 例えば我々の一部は職業を持つことは価値のあることだといひ、他の者はないという。人によって価値が違ふのは何故か？

それはこういう理由によるのではなからうか。他の多くのものと同じく、職業も又両刃の刀である。一方において勤勞する喜び、生産する楽しみ、創造する快さを生む反面、職業は又我々から自由を取り去るのである。かかる不快と、快とを天秤にかけ、その重い方によって我々は価値をそのものに荷せるのである。ここから価値のあるなしが同一物においてあるのではないだろうか。

しかしこれに反して智慧はいかなる人々も価値あると考えている。何故か。なるほどギリシヤ人のいう *philosophy* (愛知) の行動は人間の最も深い欲求であるかもしれない。その限りにおいては等しく快慰をもたらしであらう。しかし知ることは又苦痛の行為である。そのことは勤勞を、努力を、時には烈しい自己克服さえも同時に必要とする。いかなる苦痛にもまして *philosophie* (愛知者) であらうとする人間もいるだろう。しかしそうでない人間も又多いはずだ。しかもなお、彼等が知を否定しないのだ。多分これはかくなる理由によるのだろう。“知があまりに深い人間的欲求であり、この点においてのみ、人間が他の生物と区別されるのであるから。” つまりそれを否定することは人間を否定することになる。即ち人間としての自尊心がこれを否定させないのではないだろうか。その証拠に何と知性は古来弱かったか！ 権力と戦つた知性は何度敗れたか。畜の前にはなんと知性は色褪せるか。その証言の枚举にいとまがないではないか？

しかしながら価値あるものとして“知”を上げたい。それが快慰を与えるから。私はかく思うのだ。しかし“知”よ、おごることなかれ！ なんとそは弱かったことか。

しかし永遠に“知”を愛したい。私はそう願ってやまない。

この辺まで考えた時、汽車は駅近くまで来ていた。車窓にはネオン塔がそびえ、空は工場の煙突の煙で汚黒く染っていた。踏切りを渡る毎に、警笛がやかましくなり、それにつれていつのまにか先を考えることを止めていた。もうそろそろ駅に着くだろう。我々は下車の準備を始めた。

# 怠け者

2回生 川嶋 淳夫

入学通知を受けとったのが、昨年四月初旬。早速吉野に気晴らしに出かけた。以来一年たった。余り愉快な大学生活でもなかったようだ。本来の目的たる学向には余り身を入れず、愛想もよからず、いまだ親友が存在しない。

いつも風に乗かれて、フワリフワリと右に左に動きまわったにすぎない。いわゆる怠け者の部類に入るらしい。こう思ってるのは自分だけではないらしく、他人の評価もおおむね常に不景気な面をした、けしからん野郎だということらしい。

困ったことだが、教師が全然尊敬できないのだ。年賀状、暑中見舞の一本もというような殊勝な気になれぬ。(幼稚園以来教師はえらくないという偏見を持ち続けている。)

来年あたり専門的に指導を受けるようになり、個人的接触が多くなれば、境目は変わるかも知れない。ぜひそうありたいものだ。

雷に似ず本人はいたって風流人のつもりでいる。大和の産で、「香久山は歌房を愛しと耳成と相争ひき神代よりかくなるらし、西もしかなれこそ現身も帯を争からしき」という大和三山をながめて高夜時代をのんびりとすごしたからかもしれない。

浪人中に下手な俳句と川柳と雑文とラブレターを書くことを覚えた。故に現在雑文をという訳である。

一首紹介しよう。

春かけて安候と鳴けど花さかず(昨年)

風もなし鐘の響に散る秘(西大寺にて)

有難やうかれ姿りのでたさや(花の御堂仁和寺  
にて酔松いっぱい)

ようやくに流れも濁る頃となり  
水ぬるみ魚水面にはね返り) 魚つりにいった時

春霞うすぼんやりと琵琶の海(比叡山にて)

今年又ウツラウツラの春となり

春の夜響く巽のんびりと

授業  
した。  
京都  
を史跡  
言葉は  
るでは  
いでは  
俺は  
京都  
ードを  
手間は  
京都  
もう少  
少く  
おも  
いわゆ  
出かけ  
糸をた  
いう不  
味があ  
ぱって  
現在  
にいっ  
べきで  
は常に  
アル  
わない  
俺も  
ドイ  
吉川  
丸ら  
今年

授業もなかなかさぼったようである。その為か極めて優秀な成績をものにした。

京都はなかなかいい所だ。万事が鑑賞的で観光的である。一人静かに古寺を史跡を往時の栄華をしのびつつそぞろに歩くのは限りなく楽しい。(この言葉は悪い) 嵯峨野の静かなたどづまい、龍安寺一何かを考えてみたくなるのではないか。妙心寺一白壁に素敵な芸術作品有り、たまに雲水を見るのもいいではないか。

庵は寶鏡は絶対あげないことにした。単に博物館にすぎないから。

京都は厄災の町だ。いたるところにエピソードが秘められている。エピソードを雑学をつめ込むのは楽しいことなのだ。オーフンドシをしめてかかる手間がない。

京都の古寺を巡るには、哲学の一つもやらねばならないが、大和の古寺はもう少しやわらかく受け入れてくれる。

少くとも当分の間は、まだ怠けねばならないらしい。

おもしろくない時は、姜わら帽をかむって、魚釣に行くことにしている。いわゆる釣処では風流じゃない。鮎を釣る程高級でもない。ブラリと野池に出かける。いまだかつて鯉にはふられたことがない。雑音をさけ、無心に釣糸をたれるのはいい。「人間も終日魚を釣って暮すようじゃまいだ。」という不風流なものもあるが、なかなかどうしてそうでない、超然とする事に意味があるんだ。悠然と二上山をながめる境地も悪くない。たまには友をひっぱって行く。寝ころがりながら人生を思想を恋を語る。この時が一番好きだ。

現在の学生と、マージマン・パチンコは切りはなせんもんらしい。コンパにいったら、趣味はパチンコ・マージマンと得意気に話した奴がいた。憐むべきである。庵は絶対マージマンはしない。ちょっとした反逆である。反逆は常に少々の自己陶酔をもたらすものだ。

アルバイトもやって見た。家庭教師というのを、余り効果があったとは思わない。「この子らは本当に頑さ、進学難、就職難、結婚難で……。」

庵もせいぜい親孝行でもするか。

ドイツ語の単位をとったら中国語でも始めてやろう。

吉川幸次郎先生の門も成会があったらにたいやろう。

我ら繊維化学——前途洋々——無限の可能性。

今年は相変わらず怠けるが、勉強しよう。老父が期待して待っている。

庵。

# 八ヶ岳早春

4回生 竹田 敬司

冬山は美しい。何故こんな美しい世界が地上にあるのかと不思議なほどの美しさは完全である。冬枯れの荒涼とした野山にびゆうびゆう北風の吹くのも光太郎ばりの詩情があつてよいものだが、何といても冬の美しさは音にある。標高2000mあたりから森の中は雪にうもれていた。幸い道はよく踏まれていてラッセルに苦しまずにすんだが、強風は心臓を凍らすにたるしるものだ。松本平から諏訪盆地にかけての広い低地の東をさえぎっている関係で八ヶ岳の季節風は猛烈だ。然し西風の強いことは好天候の何よりの保証でもある。森の中はうそのように静かだ。沢も下草もすべてこんもりと粉雪にかくされ、秋の静寂とは又ちがったぬむるような安息の支配する世界だ。雪が音を吸収するためだろう。このムードこそ冬山に入るものの心を敷しく明るい神秘的境地にこうこうとさせるのだ。やわらかにモミヤトウヒとつつむ粉雪の造型、なだらかな変化にとんだ曲線と陰影は、大自然の彫刻家の傑作だ。これが春になれば枯げもなく溶けてしまうと思うと彼の気前よさにただ感嘆するばかりである。原生林の思うままに倒れた木、樹の上から音もなくふってくるこまかい雪片が逆光にきらきらとアルペジオをかなでる。白樺の白、雪の白、常木の深いおむついた緑と、硫酸銅のように澄んだ空と。雪の森は透明な単純な色彩の世界でもあるのだ。

快晴にめぐまれて縦走がはじまった。中山をすぎ天狗岳にさしかかる。樹林限界をぬけると冷たい強風が容赦なく頬をなぐりつける。シユカブラ（定常的な風の吹く雪面に風の方向にそつて出来るヒダ）がよく発達している。遙かに真白の北アルプス、東鞍、御岳、中央アルプスの連峰が一望だ。浅間山は冬は火口がうづまるためか煙をはずすただのんびりかまえている。急な登りになるのでアイゼンをつけた。手袋をはずすとにらまる感覚を失う。のっぺりした広い急斜面にはシユカブラはなく、ただ一面にゴルフ球をうつけたような小さい凹凸が単調に斜面をおおい、雪煙がその表面をなめる。ウィンドクラストしているのでアイゼンがサクサク気持よくしまるが、A君も下も四本爪なのでこのでっかいザックでスリッパでもしたらまず止まらない。ふ人ともピッケルなしである。緊張と同時に冬山の気配が息を止めれば

かりに  
に人間  
の心理  
に精神  
雪が風  
ントラ  
組んで  
ってく  
岳の急  
開けて  
少し出  
う下界  
よ岩と  
ら一面  
り出す  
うから  
強風は  
り込ん  
になつ  
つてい  
若しい  
比して  
ような  
もこの  
サブサ  
一步一  
尾根は  
走路は  
ところが  
おそ  
する方  
思うと  
が持て  
だ。な

かりにせまつて来る。この草も木もない吹きさらしの雪だけの世界は明らかに人間のなじめるところではないが、それを好んでやってくるのだから岳人の心理は不可解なものだと我ながら思う。200mの急斜面だけに、一歩一歩に精神を集中して達した頂上には夏山では味わえない感激の爆発がある。雪が風にとばされて露出した砂レキの赤、下界の黒い線、白と青の強烈なコントラスト、これが冬山の色彩だ。主峰赤岳とアミグ岳が巨大な入道が肩を組んで立ちはだかる様にもう真近かにそのダイナミックな雄姿をもってせまつてくる。夏沢峠にたどりついて一息つく間もなく逆光にゴラゴラ照る硫黄岳の急斜面が再び緊張を強いた。左に黒々と巨大な爆裂火口がパックリ口を開けている。300mの直登は緊張のあまり苦しさを感ぜない。ハイ松の頭が少し出ていてなつかしい香りがほのかに漂よう。ふり返って今歩いて来てもう下界となった山や森を見る時の満ち足りた気分は楽しい。これからいよいよ岩と氷の世界だ。硫黄岳頂上のゆるい雪原がなごやかにたそがれる。夏なら一面のお花畑だ。やっと見つけた石室はわずかに庇が出ているだけで、掘り出すのが大変だった。入口が分らないまま陽が落ち、満月が千曲川のむこうから登ってくると急に温度が下った。あきらめてテントを張ろうとしたが強風はそれを許さない。再びあきらめてわずかなすきまから小屋の中へもぐり込んだ。中に白骨でもころがっていそうで不気味だったが、完全な雪洞になっているので、-30°Cの恒温室で暖かい。アイゼンの糸が一本へしまがっていた。下は高山病的症状になり、カゼもひいて一切食物を受付けない。苦しい一夜が明けた。小屋を出ると一瞬目がくらむ。快晴だ。元気なA君に比して下はのまづくわづのからからで、とてもこれから行動を起そうというような体ではなかったが、A君に一日停滞してくれともいえないし、何よりもこの好天候のチャンスはのがせない。どうしても赤岳のピークを踏みたい。サブザックをもって出発した。ただ精神力と登頂の情熱だけが重い足を一歩一歩一歩上にもち上げた。あいかわらず20mに近い烈風だ。危険な横岳の岩尾根は始終注意を要求した。ナイフリッジ、トラバース、岩場の連続だ。縦走路は人でにぎわったが、皆な八本糸のアイゼンとピッケルだ。然しこんなところでピッケルは無用の長物だ。気安めになるかわり、それだけ一歩一歩がおろそかになったらマイナスだ。それよりむしろ最小限の武装でアタックする方が戦略として優れている。どうせ一歩スリップしたらおしまいだ、と思うと、おじけづくよりむしろ俺は絶対スリップしないという不思議な確信が持てる。この確信と緊張がある以上、一見危険なようで実は全く安全なのだ。ないもののひがみかもしれないが、世の中には不合理なムダが多いもの

だ。ザック一つに厳しい自然の中で生活するために必要なものをあまさずつめ込むのだから装備や食糧は極力合理的でなければならなくなる。ナンセンスなものは山ではたちまちあばかれる。そして生活と思想自体が登山という目的にそって極めて合理的になる。いくつかの岩峰を左まき右まきしてとうとう積岳を通過した。そして今、赤岳が眼前に鋭く天を突いている。吹きさらしの雪稜で小便をしているやつもいる。「醜態を見せこどうも」と笑いながら降りて行く。ぞっとする急斜面、一本アイゼンの爪がみそこなったら、遙か下方、野辺山ヶ原まで直通だ。雪煙が稜線の乗側にうずまく、青空が黒い、今まで頭上に高かった白い大きな突起がいつの間にかなくなった。2899.2m。狭い頂上はさびしい気の遠くなるような孤独の世界だ。大地がここで終って虚空と接するさいはてだ。昨日あこがれをもってながめにあのとんがった赤岳はもう見えない。南アルプスが目の先に見える、駒ヶ岳のガツシリと岩尾根を張った赤裸々な姿、雪をべつとりつけた仙丈ヶ岳の優美なにすぎまい、一さむ高くとんがっている北岳、これらには北アルプスなどとはがった独特の力強い魂があるようだ。同じルートを引きかえし硫黄岳石室についた時にはからからだった。石油ストーブがゴォゴォと景気よく雪を溶かしメシを作る。A君が料理に腕をふるう、僕等の計画は成巧した。一本のローソクをかこんで食べるカレーライスのうまさよ、シユラフに入れば天下太平だ、長々とした説明を読んでワイロを炭茶さで食べるのも又風流だ。然しまだ登山は終わっていない。

翌朝外をのぞくと一面のガスだった。晴れるのを待っている内に吹雪になった。小屋が又埋りかけていてあやうく生き埋めになるところだった。殺行の決心をして外に出ると目もあけられず息も出せない程の猛吹雪だ。視界の0%、厳しい冬山が一切のロマンチシズムをはぎとった。まともに歩けない烈風、寒気、ミズバナと息がアノラックに張りつく。ばかげていると思ってもつい気分的にまいる。然し威嚇に動じず平然と歩けばよいのだ。かすかなシユパールをたよりに硫黄のピークに達し、西南稜を下り始めたころ吹雪は猛裂を極めた。岩稜を過ぎて広い雪稜に出た時ルートが分らなくなった。目に入るものはすべて乳白色を地吹雪とガスなのか、風雪なのかさっぱり分らない。ただ粉雪が雪面を敲打つので斜面が浮き上るようだ。待っている間に一瞬視野がひろけてルート発見の貴重な機会を与えてくれる。見るとさつき行きかけた方向に一本ずっと白と黒を境する線がのびている。雪庇だ。思わずぞっとする。ルートは分ったが暴雪にもぐってちっとも進まないのでもワカンをつけた。冬山で雪崩と共におそろしい吹雪、それは視界を奪い、体温

を奪い、希望と意識さえ奪おうとする。然し開者というものはこういう時にこそ意味をもつものだ。又カにクズを打つのに開志はいらない。ただ突破出来るという確信が何よりも開志を支える、ということもこうして山が手をとって教えてくれる人生の教訓だ。幸いなことにガスが切れた、寒冷前線は通過したのだ、そして安全地帯、2500mの樹林限界に入った。数時間の開いは終わった。森の中は静かだ。一杯の熱い紅茶は五臓にしみわたる。こういう時に吸うタバコは過去の苦悶を何ごともなかったかのうに満足感と安らぎの中へしまい込む。陽がさしてポッカリとおそみしく青い空がひらけ、赤岳、アミダ岳の側面が視界を圧倒した。その人をよせつけない氷壁、この巨大さ、昨日あの頂上にいたと思うとやっと思激が出て来た。然し本当の危険は気のゆるんだ下山時にひそんでいる。急な沢に迷い込んだまではまだよかったが、何と凍った滝がブルーアイスになつてつらなり、行手をはずむ。日没がせまり、進退谷まった。やっと思沢から脱出したら今度は森林の深いラッセルがまっていた。さっきの吹雪がうそのようにケロリとして、積雪の面壁が入陽に映えた。すでに谷向は影り、深い空に岩と雪のこまやかなはだがうかび上ってバラ色にもえる。そしてみるみる色あせてゆき、静かなやさしいたそがれがおとずれる。赤岳鉾泉についた時もうすっかり暗かった。やがて積雪の岩の間から月が出た。光々とさえた光がさし込んで雪の谷向を童話の世界にした。

今日も又山をおりるのがおしいような快晴だ。凍った道が終つてほっとすると、火山灰の道はひどいぬかるみになった。白樺や唐松の気ままに生えたのびやかな高原には春の日がまぶしくおどる。疲れが一ぺんに出る。全身ガクガクいたみ、鼻の頭がひりひりする。足を引きぎり数残兵の様だが全身これ満足と飲びのかにまりだ。ふりかえると連峯がクッキリとスカイラインを切つてやけに高くみえる。下界は春だった。麦はもえ、林の中の残雪にももうあの威嚇的な厳しさはなく、うす青い青春の香りがやがて来る生命の燃焼へのあこがれを秘めて道ゆく旅人の心をつつんだ。希望を語るかのように。

山は人格を変革する。自ら大自然にゆきかけることによって知らない内に弁証法的に自らを変革しているのだ。

未知へのあこがれのおもむくまま自分の足で一步一步前進すること、これは科学精神にも通ずる人間の偉大なる行為であると心得ている。登山とは行動する喜びだ。これがスポーツたる由縁で、ワンデリングとちがうところである。山できたえられた人格は日常生活に於いてもいかなる困難にもめげずおちついて 目的へ前進する力を与える。登山は道楽でしかないが、一つの人の



生の縮図だ。何故山に登るか、*Because we live!* 実存主義みたいに「救済す」からではなく、自分が動く人間であることを自ら証明せんが為だ！

山は根気強い勤勉さと、沈着と、頑張りの学校だ。ジャン・フランコ

# 自然と人生

1回生 加原 敬助

自分らの愚見 乱文を公にするのは、はなはだ恐縮な事であるが、多数のご批判を仰ぎ、何が反響の機会ともなれば幸いである。

自然に目を向けると、実に、何事にも、用意が良いのには、ほとんど感心させられる。この事について異議を唱える人はまず無いであろう。卑近な例を採ると、どの家庭でもよく聞く事であるが、私達夫婦は男の子が二人欲しいと言い、他の家庭では男の子を二人、女の子を一人と言う。これは、人間のどうする事も出来ない事で、自然の意志に任せるより他はないが、一つの或る地域の人口の男女比率を見ると、商、工業都市、或いは農業地域によって、多少の違いはあるとしても、ほぼ一対一の割合になっている。こうなる様につくられているのだ。世の母の子に対する愛情は、この世の中で最大の愛だと思うが、この愛情も、母が子に愛情を感じようとして感じるのではない。母は子に愛情を抱くように、自然の意志に因って、つくられているからだ。我々が腹をすかして、食欲を持つのは、我々自身の意志によって、食欲を持つのではなく、自然の意志によって、食欲を感じるように出来ているのだ。しかし上に挙げた例も決して無意味に在るべくして在るのではない。

それぞれには、それぞれの意味があるのである。男女の比率が一対一である事は、今更ここで僕が言うに反ばず、意義のある事で、母の絶大なる母情がなければ、子供は成長しないし、我々の食欲にしても、これを感じなければ、即ち食べたいと思わなければ、結果は明らかである。これは、ほんの一例に過ぎないが、どの一つが欠けても、人類は完全な活動が出来得ないばかりか、自滅するより他に道はない。

人間も自然の一部に過ぎない。従つて人生も自然の一部である。僕は人生について、自然の意志に忠実にありのまま、自分の欲するままに生きるべき

だと考えている。人間が生きている事、それ自体には何の意義もない。

人類が地球上に生存している事、それ自体には何の意味もない。人間は、人類は、自然の意志によって、生きるべくして、生かされているのである。我々は(少なくとも僕一人は)人の生の意義はいくら考えても、解らないと思っている。自然の意志の奥底は、解らないのだ。神のみが知っている。という事は、誰にも分らないと言う事だ。ただし、食欲は、それ自体無意味ではあるが、人の生命と関連したとき、その意義が解るように、人生も、人間がこうして、一個の生物として生きている以上は、何か知らないが、何らかの意義があるのだ。その意義の何たるかは、自分には解らないが、意義がある事は信じなければいけない。自然が、我々に一個々々の生命を託している以上は、それなりに意義があるのである。意義がないと信じるならば、人はこれ以上生きて行けない。こう言った考えの基に、僕はこの人生を、生き抜きたいと思っている。即ち自然に忠実に、ありのまま、自己の欲するままに、生きたい。自己の欲するままにと言うのは、何も本能の命ずるままに、と言う意味では決してない。ここでいう自己の云々は、自然の意志と直結した自己の欲求である。

以上で僕のどうして(why)生きるかについての意見は、理解していただいたと思うが、何を求めて(for what) どうやって(how)、という問題になるとむづかしい。皆無に近い人生経験の持ち主である僕には、何一つ出来ないが、今古の人物の意見を採り入れ 友人の意見を参考にして、自分なりの観方を持っている。

人間は自然の意志によって、美しい物、善なる物、真なる物を求めてやまない本能を与えられている。健全なる精神の持ち主ならば、美しい音楽に、我を忘れ、善き行為、真なる物に対して、心からの感動を受ける。この真、善、美、を求めて、人生を歩むのが、自然の意志に、忠実ではないだろうか。この真、善、美、が完全なる形で、融合、統一された物が、人格と言うものではないだろうか。従つて、人格の完成こそ、人の求めて生きる目標だと思う。即ち自己の完成である。この世で全き人間はいないのに、僕などが、自己完成などと、云々するのも、全くおそれ多い事であるが、少しでも、それに近づいて、発展して行くのが、自然の意志に忠実であるように思われる。人間一人この世の中に立って生きてゆくこと、それだけでもう困難な事であるのに、自己完成を旨ざしての歩行の中には、それは予想もつかない、苦痛が待ちかまえている事は、間違いない。我々は覚悟すべきである。自然はこの事を考慮して、我々に努力とか、忍耐とか言うものを与えてくれている

この武券をしっかりと構えて、目の完成にいてしめ、とらりの小自心志志  
 である。自分は、(自分自身 そう思っているが)あまり能力のない人間で  
 ある。しかし人間の本当の幸福は、能力の大小ではない。それぞれの人間が、  
 自己の内に宿いた自己完成に、自分の能力の全てを、最大に生かし、生かし  
 て、生かして、生かし抜いて、その結果に満足する人が、最大に幸福な人だ  
 であると思っている。自己を最もよく生かす人は、自分の尊敬する人であるし、  
 そんな世界こそ、自然の意志に従った世界であろう。今自己をあくまで生か  
 せと言ったが、自己を生かす争いによって、他人が自己を生かすのを邪魔して  
 も良いと言うのではない。自分を一つの自然の愛児として認める以上は、他  
 人も又同等の資格を有する人間だと、認めなければならない。自分の自己を  
 生かし、又同時に、他人の自己を生かさしめ、共に発展してゆくのが、自然  
 の意志なのである。

結局、自分は、自然の意志に従って、生き、苦しみ、喜び、そして死ぬの  
 が、人間の自然から与えられた命令だと思ふ。自然の意志に反した行動を採  
 れば、罰を受けることになるが、ともすれば誤解し易い本能や、諸々の誘  
 惑に打ち勝って、自然の愛子(くまなこ)として生き抜く為には、自然の意志  
 の微妙さ、稜重さをよく心得て置かなくてはならないようだ。

詩

いのちあふるる ころともなれば

2回生 かない まさひろ

いのちある	ころともなれば
みどりもえ	こころはおどる
たにかげに	みずのさわげば
ひのひかり	こかげをゆれる

あたたかさ	ころともなれば
かぐわしき	つぼみをときて
ひたひたと	かぜのしらべは
おおぞらに	みちただよひて

あかねさす	ひのくれぬれば
ほのぼのと	こころあたたかさ
はらはらと	あめのいろさえ
ゆかしきぞ	ほのあわきゆめ

先立  
い。よ  
のであり

1. 柯  
従来の  
プロピ  
つて或  
わゆる  
この  
天然結  
解明さ  
をもつ  
学術的、

2. 原  
ポリ  
でオレ  
主要性

近軍  
的に得  
ち高才

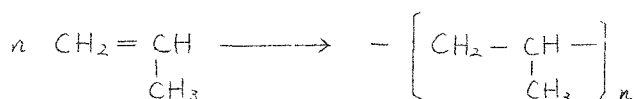
# ポリプロピレン紹介

4回生 早川 和彦

先立って「最近よく話題になる“ポリプロ”について 紹介をやってほしい。」という話が一回生の方々の間にありましたので、はなはだ粗末なものでありますが、こゝにポリプロの構造、重合などに関して書いてみました。

プロピレン

ポリプロピレン



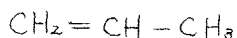
1. 何故、ポリプロピレンが学術的、産業的に重要視されるのか。

従来の重合方法では、油状もしくは可塑性の *semi solid* であったポリプロピレンは、ナッタ (G. Natta) 教授とモンテカチニ社の協同研究によって或る種の不均一系重合触媒を用いて分子配列が立体的に規則正しい、いわゆるアイソタクチックポリマーとして重合される様になった。

このアイソタクチック・ポリプロピレンの結合方式、重合物の結晶構造は天然結晶性蛋白の規則性に飛躍的に近づいたものであり、重合機構が完全に解明された時には、従来のモノマーによって、化学的、物理的に優れた性質をもつ数多くのポリマーが合成され得る可能性が充分あると考えられる故に学術的、工業的に非常な興味をもって迎えられたのである。

2. 原料プロピレン

ポリプロピレンはプロピレンの重合体であり、プロピレンは学名プロペンでオレフィン系炭化水素の一般式  $C_nH_{2n}$  の  $n=3$  に当るものである。



主要性質は次の通り 分子量： 42.046

ガス密度： 1.9149  $\text{kg/m}^3$  ( $0^\circ\text{C}$ )

B.P. :  $-47.70^\circ\text{C}$  (1気圧)

近年石油化学の異常な進歩により、プロピレンはその副産物として、必然的に得られるようになった。それは主として次の方法によるものである。即ち高オクタン価ガソリンの生産を目的とした白土、シリカ・アルミナ、シリ

カ・マグネシア等を触媒とした接触分解法よりの石油排ガス，又はエチレン製造時の副生ガスより得られるものである。これらの方法によって得られたプロピレン量は，35年度では，約78,000tに及ぶものであるが，これらは一部を除いて今まであまり有効な化学工業原料としては利用されずに，大部分プロパンと共に燃料として使用されて来た。したがってこのプロピレンをポリプロピレン製造原料として用いるとすれば経済的に低廉かつ大量のプロピレンが供給されると考えられるのである。

### 3. プロピンの重合

#### 3.1 重合触媒

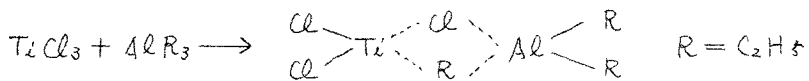
ナツタ教授によるα-オレフィン(ここではプロピレン)の重合触媒の研究は，低圧法ポリエチレンの合成に使用されるチーグラ-触媒(たとえば  $Al(C_2H_5)_3 + TiCl_4$ ) に発したがいろいろの遷移金属(同期律表4a, 5a, 6a 塩化物とアルキル化合物との複合触媒の中から  $TiCl_3 + Al(C_2H_5)_3$  の組合せが，α-オレフィンに対して選択性の高い触媒である事を見出した。

この  $TiCl_3$  と  $Al(C_2H_5)_3$  とによるナツタ触媒の他にも，スタンダード・オイル社，フィリップ社等に於ていろいろな型の重合触媒が発見せられているが前述したナツタ触媒が学術的にも深く研究されており工業的にも重要視されている。プロピレンの重合で触媒として原子価を異にする金属の塩化物をトリエチルアルミニウムと共に用いた場合，生成するポリマーのアイソタクチックポリプロピレンの含有率—即ち触媒の(立体)選択性を下の表は示している。

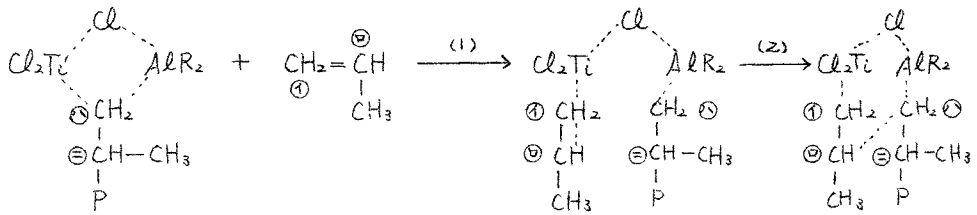
原子価	$TiCl_n$	$ZrCl_n$	$VCl_n$	$CrCl_n$	$MoCl_3$ $MoCl_5$
II	75				
III	85		73	36.4	50
IV	48	52	48		
V				21	

#### 3.2 重合機構 (4を先に読まれてもよいと思います)

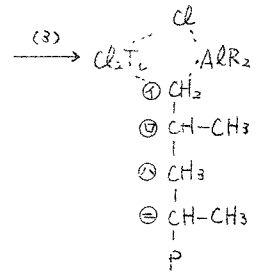
ナツタ触媒を用いてアイソタクチックポリマーを与えるプロピレンの立体特異性重合は，ナツタ教授によれば必ず原子価の遷移金属化合物と有機金属との錯化合物による配位アニオン機構と考えられている。錯化合物の構造は現在のところ次のような化合物と考えられている。



そして、この場合、ポリマー鎖の成長過程は次の如しと考えられている。



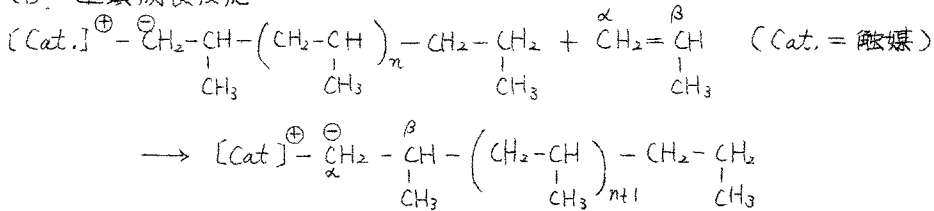
(1)の段階でポリマー鎖及びモノマーがそれぞれAl, Tiに結合して固定され, (2)の段階でd, l二種の結合方式の一方のみが優先的に行われる。このポリプロピレンの重合は, 100°C以下(相宅実験室で行ったもの)で行われ, 反応温度はかなり低い。そのためにモノマーが触媒の表面に吸着して活性化され, (1), (2)が触媒表面からはなれる時に重合をおこすのであるが, (2), (3)のこのはなれる時に生ずる吸熱と重合反応の発熱とが相互に差引きされるため, 反応温度がきわめて低温に保たれ, そのため一定のメカニズムに従って反応が進む。したがって立体的に規則正しいアイソタクチックポリマーが得られるものらしい。



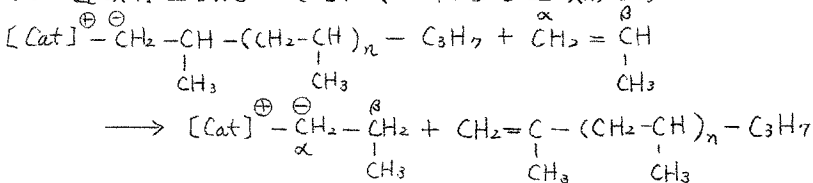
この様な触媒表面に於ける重合を特に *Fixed-bed Polymerization* (固定床重合反応とも訳すべきか)と呼んでいる。この様な立体特異性の成因についてまだ決定的な証明がなされていない。しかしプロピレンのナツタ触媒による重合の反応機構が種々の方面から徹底的に解析された結果、重合鎖の開始・停止の各素反応機構は次のようなものと考えられている。

(i) モノマー濃度に比例する素反応

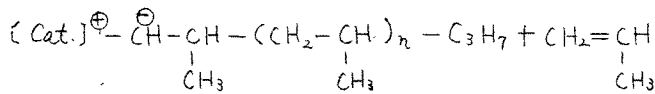
(1) 連鎖成長反応



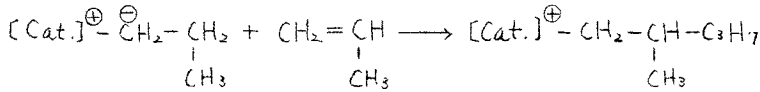
(2) 連鎖停止反応 (モノマーによる連鎖移動)



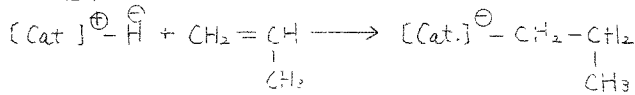
または



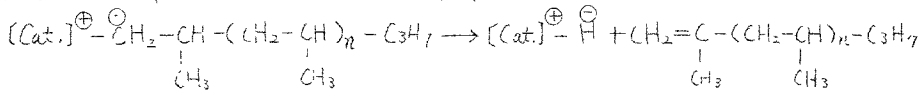
(i) 新しい鎖の開始



または

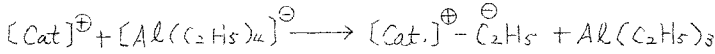
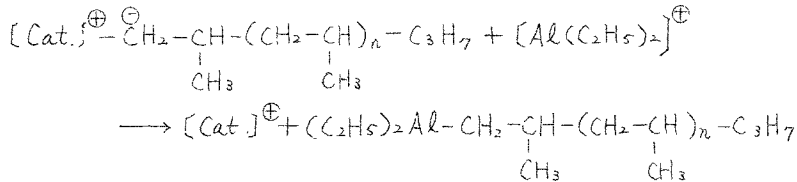
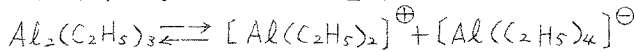


(ii) 成長鎖の活性水素化合物の分解 (自然停止)



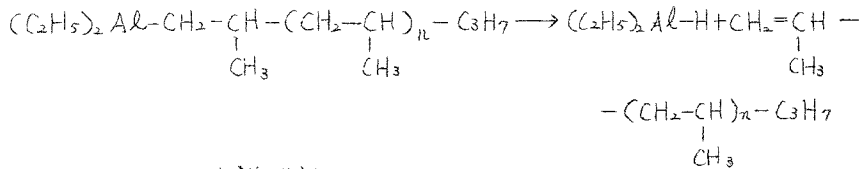
(iii) トリエチル・アルミニウム  $\text{Al}(\text{C}_2\text{H}_5)_3$  による連鎖停止反応

溶液中の  $\text{Al}(\text{C}_2\text{H}_5)_3$  は大部分二量体として存在し、その解離定数は小さい事が知られている。この二量体が連鎖移動を行うものとみられる。

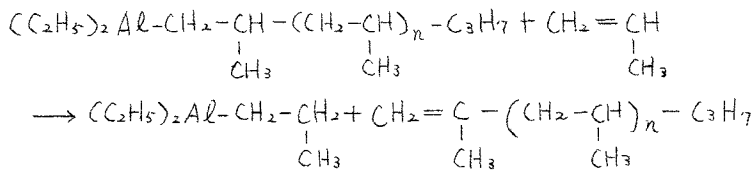


ポリマー鎖と結合しているアルキル、アルミニウムは、さらに次の如く  $\text{Al}_2(\text{C}_2\text{H}_5)_6$  を再成する。

(i) 水素化物への解離



(ii) モノマーへの連鎖移動



(IV) 三塩化チタンによる連鎖停止反応

この機構は明らかでないが、溶解性のチタン錯化合物によるものではないかと考えられている。

以上より、プロピレン重合の総括反応速度  $V$  は次の如く表せる。

$$V = e^{-E_p/RT} \cdot C \cdot m$$

$$= k_p P \cdot G_{Ti}$$

ただし  $E_p$ : 成長反応の活性エネルギー (= 11500 ± 500 Cal/mol)

$C$ : 活性中心の数

$m$ : 溶液中のモノマー濃度

$P$ : モノマー分圧

$G_{Ti}$ : 系中に存在する  $TiCl_3$  の量

$k_p$ : 反応速度定数

また重合速度  $X$  は

$$\frac{1}{X} = \frac{\text{停止反応速度}}{\text{成長反応速度}} \quad \text{であるから}$$

$$\frac{1}{X} = \frac{k_1 + k_2 P + k_3 P \sqrt{C_{Al}} + k_4 P (G_{Ti})^\beta}{k_p P}$$

ただし  $k_1$ : 成長鎖の自然分解速度定数 [ii]

$k_2$ : モノマーによる停止反応速度定数 [i-□]

$k_3$ :  $Al(C_2H_5)_3$  による停止反応速度定数 [iii]

$k_4$ :  $TiCl_3$  による停止反応速度定数 [iv]

$C_{Al}$ : 溶液中の  $Al(C_2H_5)_3$  濃度

$\beta$ : 0.1 ~ 1 の定数

この反応速度式および重合度の式は実験結果とよく一致するものである。触媒と反応速度、重合度とのグラフを見る場合上記の式を考に入れておくくと便利である。

4. ポリプロピレンの構造

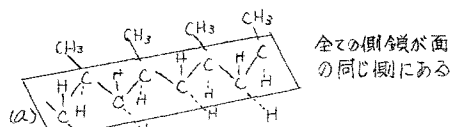
4.1 立体構造

アイソタクチックポリマーの諸性質は、固体に於て高い結晶性として現われて来る。

今、糸状分子を充分引きのばした分子模型を考える時ジグザグ鎖を想像し得る。

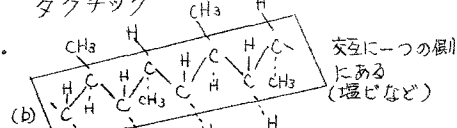
この鎖の backbone は同一平面上にあり、

$CH_2 = CH$  (この場合では  $CH_2 = CH$ ) なる

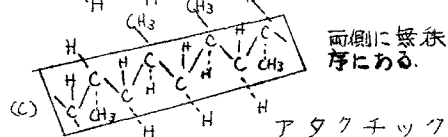


全ての側鎖が面の同じ側にある

シンチオタクチック



交互に一つの側にある (塩ビなど)



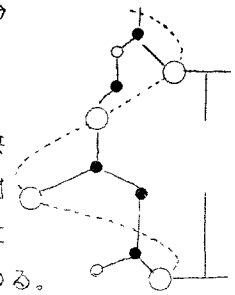
両側に無秩序にある。



ニル系ポリマーでは前頁の如く  $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\gamma$  の不斉炭素に基く異性体のある事は明らかである。通常のラジカル重合で得たポリマーは  $\gamma$  に屈し、ナッタ教授の得たアイソタクチックポリマーは  $\alpha$  に屈している。

実際のポリマーではこの様には伸びきっておらず、置換基（この場合では  $\text{CH}_3$ ）の空間障害のためにモノマー1個毎に  $120^\circ$  ずつゆるい螺旋構造をとり、3個のモノマー単位をもって一螺旋周期をなしX線的には繊維周期  $6.5 \text{ \AA}$  である。

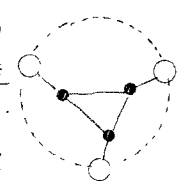
ポリプロピレンの螺旋構造



#### 4.2 立体構造から来る光学活性

この様に螺旋構造を作るため、螺旋による分子全体から来る光学活性—分子不斉—が問題となって来る。螺旋構造を作る以上、右巻と左巻の区別があつて然るべきであり、天然の蛋白質が  $l$  系のアミノ酸をもって構成された右巻を安定とする様に  $lll$  系又は  $ddd$  系のアイソタクチックポリプロピレンがそれぞれ安定とする巻き方がある筈である。この様な螺旋が光学活性を示す事は明らかである。しかし、合成化学に於てしばしば見られる様に、アイソタクチックポリマー（ここではポリプロピレン）の生成に於ても  $ddd$  系のポリマーを生じる処では常に同じ確率で  $lll$  系のアイソタクチックポリマーが生成するはずであり全体としては相殺されて、光学活性を示さないものと考えられている。

○:  $\text{CH}_2$   
○:  $\text{CH}$   
●:  $\text{CH}_3$



#### 4.3 ステレオ・ブロックポリマー

ポリプロピレン重合物の分析の結果、アイソタクチック部分と同時に副生する無定形重合体の粘度、ガラス状転移点（低分子単一物質に於ける凝固点のようなもの）が、サンプルによりかなり異つている事が発見せられた。ナッタ教授らはこれらの主鎖の構造について  $ddd$  系または  $lll$  系の部分がある程度の長さで交互に並んでいるような構造を考え、ステレオ・ブロックポリマーと名付けている。

### 5. 物性

アイソタクチック・ポリプロピレンの物性とアタクチック・ポリプロピレンの物性とを列挙して比較した。

	アイソタクチック	アタクチック
外 観	白色粉末、一次転移点に近い温度ですり合わせると粘着性、屈曲性の薄片となる。	ガラス状転移点以上ではゴム状、以下の温度ではガラス状

物性表—前頁のつづき

アイソタクチック

アタクチック

X-線	130°C以下の温度では結晶性	無定形線状重合体に特有なハロー
偏光赤外	いちじるしい二色性を与える	二色性なし
熱解点	175°C附近に一次転移点	100°C以下でも融解が軟化
密度	高い	低い
力学的性質	結晶性配向と異方性, 20%の変形に対して可逆的な変形を示す	ガラス状転移点以下では粘弾性
引伸強度	高分子量, 高配向のものは非常に高い。	低い

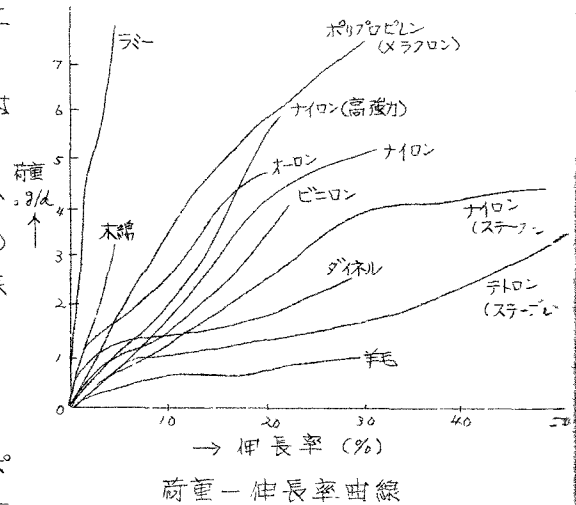
6. ポリプロピレンの繊維性質

性質	ファイラメント	ステープル	性質	ファイラメント	ステープル
密度	0.91	g/cm	加熱による作用	190°C 可塑と	175°C 溶解
乾強度 I	5~7,	5~6.5 g/den	弱酸の作用	安定	
湿強度 II	100	100 %	強酸の作用	"	
乾伸度 I	15~25,	18~25 %	弱アルカリの "	"	
湿伸度 II	100	100 %	強アルカリの "	"	
ヤング率	50~65,	50~65 g/den	有機溶剤の作用	塩素化溶剤に高温で侵される。普通溶剤に侵されない	
引掛強度 II	85	85 %	耐日光性	耐えない	
結節強度 II	85	85 %	使用染料	顔料染め, 改良纖維を用いクロム酸性, 金属処理染料に可染	
屈折強度(切断までの折曲げ数)	206,000	回	防虫性	侵されない	
繰り返し抵抗(切断の繰り返し)		32°			
瞬間弾性回復	5% }	35 %			
永久伸長	伸長 }	0 %			
吸湿率 I		0.05 %			
40°Cに於ける強さ	7~9.5	g/den			
40°Cに於ける伸び	8~10	%			
熱安定性(130°C 空气中30分の収縮率)		2.5 %			

( I : 21°C, 65% RH )  
 ( II : 対乾強度比 )

前頁の表から考えられる事

1. 比重が小である。(ナイロン 1.14, アクリル 1.17, 羊毛 1.32, 木綿 1.50)  
衣料用として比重の小なる事は着用上也快適であり、また同重量の糸から長い織物が得られるという経済的利点がある。
2. 強度は衣料としての実用上の場合でもナイロンに勝るとも劣らない強さを持つ。(工業用としては 11 g/den 位は出し得るらしい) 比較のため右に紡織維の荷重-伸長率曲線図を上げておきます。
3. m.p. 175°C でナイロンより低いのは欠点である。
4. 染色性-普通の染料では染りにくい。しかしこの問題は近く解決されるものと思われる。(相宅研究室でも昨年末ポリプロピレンの染色法が研究され、かなりの成果を上げている。)
5. その他



直接この表から知られる事以上にポリプロピレンは織物繊維の場合、各種合成繊維中、加工性が最もすぐれている事、羊毛より低い熱伝導率を持つため同一条件では保温性に於て、羊毛よりも若干すぐれている事がわかっている。(同一条件とは、例えば熱湯浴槽の保温材として降下温度を測定した場合など) しかし保温力はその内蔵する空気量が決定的なファクターとなる故、織物の加工方法によって一定ではない。

この外、繊維の性質、結晶構造、結晶化度(と温度との関係)、ポリプロピレンの物性、プラスチックならびにゴムとしての諸性質等々、興味ある問題はたくさんありますが、くわしい事は譲渡されると思いませんので、この程度の紹介で終わらせてもらいます。

ノートやら、参考書やらの“つなぎ合せ”紹介のため、相当読みづらい点があると思いますが、お氣付の時はよろしく御教示下さい。

ついでに参考書を紹介しておきます。

(1), (2) は本紹介の種本です。(3), (4) は、かなり程度が高いと思います。(というのは、研究論文のレポートで入門書としては不適だと

考える

1.

2.

3.

4.

これに

れにも

前回

あった。

暗の製

こうい

ルの抄

原報

のよう

Reacta

考えるからです。)

1. 「ポリプロピレン」 プラスチック材料講座 16  
日刊工業新聞社 360円
2. 雑誌「化学」増刊号「高分子化学」 化学同人  
(この書物中、10頁程にまとめてあります。) 340円
3. 雑誌「高分子」 ポリプロピレン特集  
1960年10月号
4. 「ポリエチレン繊維およびポリプロピレン繊維の研究」  
旭宅省吾

この本はポリエチレン、ポリプロピレンについて旭宅研究室にて、研究されて来た数年までの成果が一冊にまとめられたもので、ポリプロピレンに関しては、重合、紡糸、ドラフト効果、延伸、熱処理、結晶化、染色等々について詳細に論じられています。

これ以外の書物でも、最近の、合成繊維、プラスチックスの本ならば、どれにもポリプロピレンおよびアイソタクチックポリマーの説明があります。

## Carothers の論文集から (Ⅲ)

### クロロプレンの周辺

4 回 生 吉 井 詢 二

前回の縮重合に対する Carothers の式は理想的な条件のみを考えた場合であった。その条件からの偏倚を考慮していないために彼の式は、アルキッド樹脂の製造の場合、広範囲には使用されなくなる。

こういう場合については、C.A. 1959 November Vol. 53 に次のタイトルの抄録がある。

Correction factors applied to the Carothers equation for  
condensation Polymerization < Raymond F. Carimody  
socony Paints Products Co., Metuchen, N.J.  
Federation Paint & Varnish Production Clubs.

30

49~57

(1958)

原報がないので、詳細は不明であるが、C.A.に依ると、彼の方程式の場合のような理想的な重合条件から偏倚<sup>かたよ</sup>るのは、多官能性反応体 (Polyfunctional reactant) を使うために、副反応が起るのである。そこで一定のアルキッド

重合反応に対する偏差を色々実験的に求め、それらを一つの correction factor (補正係数) で結びつけるようにした。又ポリウレタン系の様な他の縮合重合のタイプにまで、その方法を広げ、例を上げている。

前回で述べたように、官能性度が、数百~数千に達するところの反応は、重要なもので、ゴムの加硫はその一例であった。ゴムは元来アメリカの産物であって、それがヨーロッパにもたらされ、18世紀には消ゴムに使われたところから、rubber (rub = こする) という名を頂戴したわけである。アメリカに於ける最初の合成ゴムは1931年に発表された。当時の研究目標といえは、

(1) ゴムの構造を完全につきとめること。

(2) 天然ゴムに代るべく人工的にゴムを作り出すこと

の二つに sum-up されるであろう。

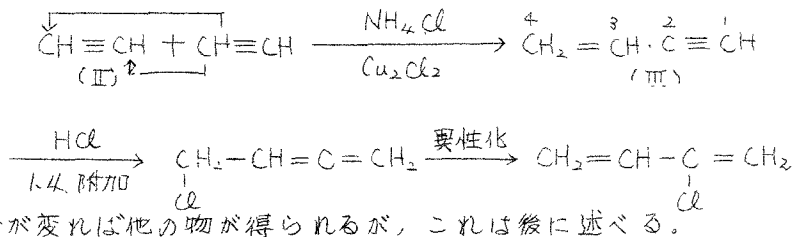
この分野に於いても Carothers は輝かしい研究を遂げたのであった。

ポリクロロプレンはその合成モノマーがクロロアレンであるために、ポリクロロアレン又はクロロアレンゴムと呼ばれている。

この研究のそもそもの始まりは

塩化銅と塩化アンモンの溶液中に、アセチレンガス(II)を通じると、重合を起すということも Nieu Wland が発見したことによる。Carothers はその dimer であるヴィニルアセチレン(III)を高収率を得られるように工夫したのである。

<クロロアレンの調製>



<クロロアレンの調製条件>

175g の濃塩酸 (Sp. Gr. 1.19) と 25g の塩化銅と 10g の塩化アンモンの混合物を完全に冷却した加圧ビン中に、50g の冷ヴィニルアセチレンを入れる。加圧ビンをお湯の中に入れ、その温度を約 30°C に保つ。その中で四時間振盪する。内容を分液漏斗に移す。下の水層を除去し、油状層をお湯で洗い、少量のカテコール又はピロガロールを混入した塩化カルシウムで乾燥する。次に冷却分縮釜と受益を備えた efficient column を

通して、真空蒸留にかける。かくしてヴィニルアセチレンの約65%の収率で純粋なクロロプレンが得られる。

<クロロプレンの物理的性質と分析値>

クロロプレン(I)はエーテルの如き特徴ある臭気のエチルブロマイドに似た無色液体であって、有機溶媒には、大体混れるが水にはほんの少ししか溶けない。

isoteniscope に依る蒸気圧測定法による沸点は

(B.P)	(蒸気圧)
59.4 °C	760 mmHg
46.9	500
40.5	400
6.4	100

蒸気圧に関しては、 $\log \text{蒸気圧 (mmHg)} = -\frac{1545.3}{T} + 7.527$

蒸気潜熱の計算値 = 7090 cal

Sp. Gr  $\alpha_{20}^{20} = 0.9583$

屈折率  $n_c^{20} = 1.11540$

$n_D^{20} = 1.4583$

$n_F^{20} = 1.4690$

M<sub>c</sub> と M<sub>D</sub>

	M <sub>c</sub>	M <sub>D</sub>
実測値	25.06	25.26
計算値	24.67	24.66
差	0.39	0.60

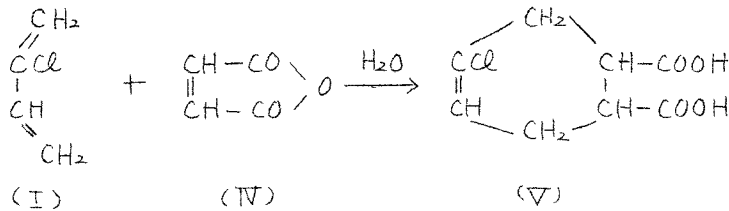
25°C での粘度 0.394 c.p.

分析値: C<sub>4</sub>H<sub>5</sub>Cl に対して

	C	H	Cl	Mol. Wt
計算値	54.25	5.69	40.06	88.5
実測値	54.37	5.95	$\begin{matrix} 39.51 \\ 38.81 \end{matrix}$	89.5 (infreezing benzene)

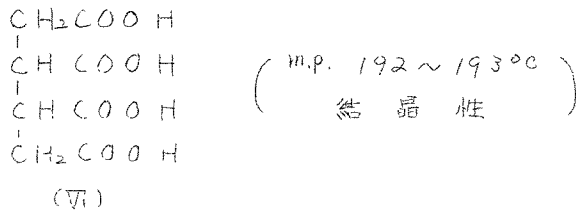
<クロロプレンの化学構造と化学的性質>

合成物の組成と、その色々な反応によって、クロロプレンは、Chloro 2. butadiene 1.3 (I) の構造であることが確かめられた。例えば、無水マレイン酸(IV)と容易に反応して、加水分解後結晶性の生成物を与える。d.h. Chloro 4 tetrahydro 1.2.3.6 phthalic acid (V) である。

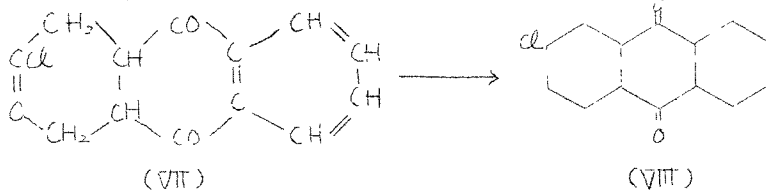


この生体物の塩素原子は煮沸した濃アルカリに対して非常に抵抗性がある。

又煮沸した硝酸を酸化すると、ブタン $\alpha, \beta, \gamma, \delta$ テトラカルボン酸(VI)を生じる。



又オナトキノンを用いさせると Chloro 2 tetrahydro (1,4,4a,9a) anthraquinone 9,10, (VII) を経て、アルカリの存在で、これを酸化すると、スムーズに  $\beta$  chloro anthraquinone (VIII) になる。

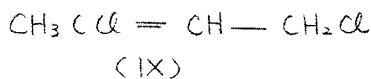


(これは mixing melting 法によって確認された)

Diels と Alders の研究からしても、又これらの研究の結果によっても、クロロフレン中に一対の共軌二重結合が存在することがわかる。又塩素の位置も判明する。

アロホルムの溶液中でクロロホルムは置換が起らない内に、約2モルの臭素を附加する。このものは容易にアルカリ性過マンガン酸塩溶液を脱色する。

塩化オ-銅の存在で塩酸水溶液と反応する。その反応は 1,4 附加で Dichloro 1-3. butene 2 (IX) が得られる。



このことについては、機会があれば述べることにする。

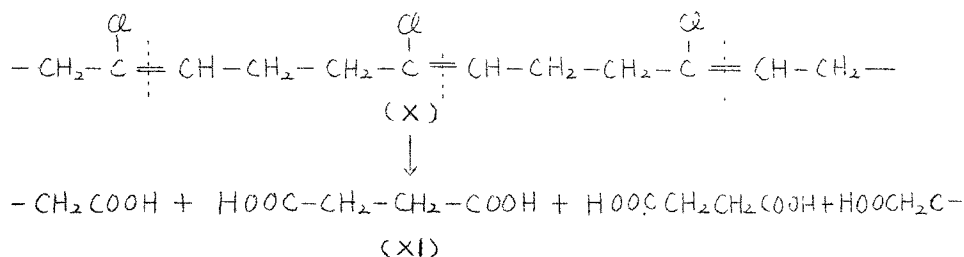
クロロプレンの塩素原子は非常に堅固に結合している。

アルコール性硝酸銀、水酸化ナトリウム、ピリジンで煮沸すると、トランスの塩化物イオン (chloride ion) が現われる。

<クロロプレンの自然重合>

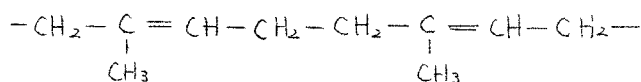
クロロプレンは自然の状態非常にスムーズに重合するが、酸素が存在しないと、重合速度は緩やかになる。自然重合のものは Carothers らは  $\mu$ -polychloroprene (X) と呼んだ。

$\mu$ -polymer の構造は、これを熱硝酸で酸化すると、コハク酸 (XI) を遊離するに至る事から推定される。

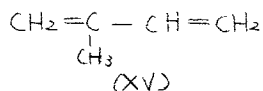
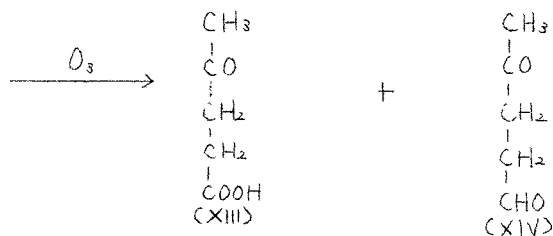


一方天然ゴム (XII) の構造は、これをオゾン化した主要生成物か、levulinic acid (XIII) と levulinic anhydride (XIV) とあるところから isoprene (XV) が head to tail に結合していることが解る。

<Harries, Pummerer>



(XII)



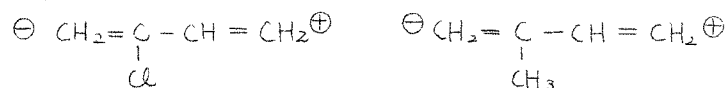
$\mu$ -polychloroprene は Ozone の劣化作用に対しては、天然ゴムより抵抗力が大きい。

イソプレンを放置したまま、重合を完了させるには数年もかかる。(クロロプレンはその700倍も早い。) その速度のちがいは少くともクロロ



フレンの塩素原子が活性化に一役買っているように思える。イソプレンの場合のメチル基は極性が弱すぎで、その効果が小さいのであろう。

同様のちがいは塩化ヴィニルとプロピレンの重合の場合に考えられるであろう。この場合塩素原子は、二重結合を強力に活性化するように働くばかりでなく、二重結合の付加反応の方向にメチル基より、より強力な影響を与える。d.h.分子の極性を有効に調節するのである。(ゼエン中のメチル又はクロルの Inductive effect を考える。)



以上のように理論的にクロロプレンの重合はイソプレンの場合よりはるかに速く進行するばかりでなく、ポリクロロプレン鎖中での単位の変換が起る機会も少なく、head to tail になるであろう。

上式はうまい具合に  $\mu$ -polychloroprene の化学的挙動を表わしているが、このものの着るしい物理的挙動 (e.g. ゴム弾性を思い出せ) を説明するには満足なものではない。

唯ポリプレン置換鎖 (ゴム, polychloroprene etc) の単位は、幾何異性の可能性の有ることと、それらが、-cis-cis-cis-又は-trans-trans-trans- order に配列されるであろうことを示している。

分子は绕りまわらず伸び切った形より、スパイラルにくるくるまわっているだろう。

(クロロプレンの自然重合の例)

Ca 40g のクロロプレンを 50 c.c. のソーダガラスのビンに入れ、コルク栓で閉め、実験室温度 (Ca 25°C) で直射光をさけ、放置しておく。24 時間後試料の粘度は可成り増加している。四日後には、コチコチの照色で透明なゼリーと固化する。そのものは可成りの未反応のクロロプレンを含んでいる。更に反応が進むと、この Jelly は容積が減少し、更に硬く濃縮する。十日後には全てのクロロプレンは重合してしまう。

<  $\mu$ -polychloroprene の諸性質 >

クロロプレンの自然重合に依るものは無色又は青色~黄色の透明で、反撥力のある弾性体であって、完全加硫した軟性ゴムに似ている。

$$\text{密度} = \text{Ca } 1.23 \text{ (20°C)}$$

$$\eta_0^{20} = \text{Ca } 1.5512$$

$$\text{tensile strength} = \text{Ca } 140 \text{ Kg/cm}^2$$

elongation at flake = Ca 800%

非可塑性で、強く膨潤するが、ベンゼン、クロロホルム、二硫化炭素、ニトロベンゼン、ピリジン、アニリン、酢酸エチル、エーテル etc に不溶である。又天然ゴムに比べてガソリンや潤滑油を吸収する傾向が少ない。

$\mu$ -polymer の性質は、その形成時の条件が大きくものをいう。

重合中に多量の空気中又は酸素があると、重合物は色が黒くかたくなる。高温での重合では、polymer は軟らかくなり勝ちで、テルペン状の臭気がするが、これはキハツ性の  $\beta$ -polymer が存在するためであろう。  
(後述)

純粋な炭化水素ゴムは自動酸化を非常に受け易いが、 $\mu$ -polychloroprene は可成り抵抗性を有する。しかし長時間空気中光に曝らしておくと、次第に黒ぐんでくる。又固くなる。この自動酸化に対しては少量の antioxidant をポリマーを処理することで防ぎ得る。

次に X 線解析図について

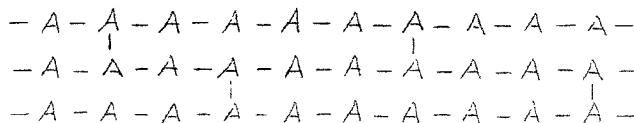
未延伸ゴムの X 線図は液体又は無定形固体に特有の一重の拡散した環のみを示すが、延伸ゴムは point diagram を示す。Mark に依れば、イソプレンや他の不飽和の炭化水素から成る合成重合物は延伸時でも、液体に似た回折図を示すとしているが (Ber. 61 1939 (1928))、 $\mu$ -polychloroprene を約 500% (5 倍) に延伸した時のものは、一連の層状線を持っているところの全く良く発達した fiber diagram を示す。天然ゴム同様鮮明な X 線回折図を示す性質は他の合成ゴムにはないことを考え合わせると、その分子構造が (当時の) 他の合成ゴムより、規則正しいことを示している。

繊維軸に沿った同位周期は  $4.8 \text{ \AA}$  でクロロプレンの計算値長にほぼ等しい。これは Hauser と Susich に依る  $\beta$ -グッタペルカに対する同位周期実測値と全く一致する。

cis-ポリプレン鎖中の同位周期の計算値は約  $2 \times 4.1 \text{ \AA}$  であるところから、cis より trans 配置であると仮定した方が良く一致する。又ポリクロロプレンの未延伸サンプルは天然ゴムと全く似た無定形環を与える。この環に相当する Spacing は  $4.86 \text{ \AA}$  である。

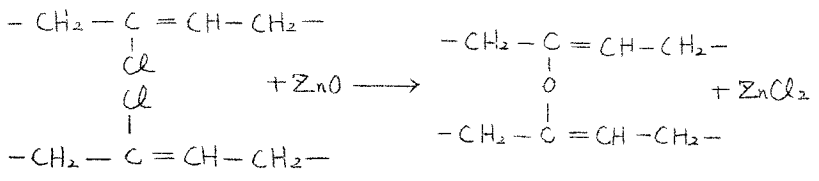
最後に  $\mu$ -polychloroprene は未加硫ゴムよりも、加硫ゴムに似ている。又非可塑性でもある。d.h. 加熱しても塑性を示さない。ベンゼン、クロロホルムの如きゴムの溶剤中では膨潤するだけである。

(劣化はする)。このような挙動からすると、単なる線状構造より、三次元的ポリマー構造を採るものと考えられるので、 $\mu$ -polychloroprene 鎖中で偶然に諸々の点で化学結合を起しているものと思われる。A を構造単位とすると、



のように、偶然の点で架橋している。架橋は酸素の仲介に依って起る。しかし平行した鎖の二重結合が直接相互に飽和し合つて結合すると考える方が<sup>もっと</sup>むしろいい。その鎖は非常に長いから、非可塑性構造を作るには、ある偶然の点でのみ架橋されると考えるべきだ。

(附) 人工的な架橋は、硫黄や金属酸化物、特に ZnO により行われる。この場合エーテル結合を生じる。



<  $\beta$ -polychloroprene >

高い温度 (e.g. 60°C) でクロロプレンを重合すると得られるものは、 $\beta$ -polychloroprene と呼ばれる。このものは軟らかく、テルペン状の臭気をもつ。この臭気はキハツ性クロロプレンポリマー ( $\beta$ -polymer) の存在による。このものはクロロプレンが、 $\mu$ -polymer に変化することを防ぐピロガロールやトリニトロベンゼンの存在でクロロプレンを貯蔵しておくか、又は加熱することによって多量に得られる。 $\beta$ -ポリマーは蒸溜によって、スフラクションに分けられる。その臭気は芳香性でテルペノの様である。これらの構造は環状 dimer であるらしい。類似の物質が, isoprene, butadiene, dimethylbutadiene から得られる。

$\beta$ -polychloroprene は安定な物質で、それ以上重合する気配はない。

< クロロプレン重合に反ぼす諸影響 >

(d) 触媒；酸素はクロロプレンを  $\mu$ -polymer に変化させる非常に強力な触媒である。高真空中で蒸溜して、空気に曝らさず、ガラス管に封入したクロロプレンは、一、二ヶ月後になって始めて、粘度増加が認められる。一年たつても、未だ  $\mu$ -polymer への変化は完結しない。B.P.O. のような過酸化物も又触媒として働らく。

B. P. O. を含む試料ではしばしば可成りの誘導期間があつて、それからある点で反応は突然開始し、非常に迅速に広がる。反応熱は試料を焦がす程である。イソプレンの若干の研究に依ると、本當の触媒はキハツ性の過酸化物であるらしい。試料の調製期間中に空気に曝らすことなく、クロロプレン試料を作ることは不可能である以上、高真空で蒸留したものでも全く触媒がないとは言えない。最適な触媒効果を生むに必要な酸素の量は甚だ小さい。常温ではクロロプレン試料の(α10% (容積%) に等しい。空気の存在で、八乃至十日経てば  $\mu$ -polymer への変化は完結する。これより空気の量が多いと、この変化に要する時間が若干大となるが、空気又は酸素の割合が大きくなつても、その粘度は大きく変化しない。且つ酸素の量が多くなると最終生成物の性質に影響するもので、一般に、普通の場合の少し黄色いものの代りに黒褐色の少し固いものが得られる。

$\beta$ -polychloroprene の生成速度は酸素や過酸化物に依つて加速されるとは認められない。

(b) 温度、圧力、光 etc

クロロプレン重合に於て、触媒、抗触媒の効果は非常に強力で、正確に調節するのはむづかしい。といふのもこの反応に対して、温度、圧力、光が反応速度に及ぼす影響に就いて、相互関係を精密且つ量的に得ることが不可能な状態である。

(c) 禁止剤: antioxidant として一般に切く物質は、クロロプレンの  $\mu$ -polymer で重合に対して強力な禁止剤として働く。常態下でクロロプレン試料は四日で約40%のポリマーを含む濃いJelly状になるが、0.1% カテコールが存在すると、数ヶ月の間、液体のままである。この事実から、クロロプレンの  $\mu$ -polymer の自然重合は通常トレースのクロロプレン自動酸化物質が存在していることによるのだといふ事が確かめられる。

$\beta$ -polymer の生成の場合は酸化作用に無関係である。

次のようなタイプの化合物は一般に禁止剤として働らく。

フェノール、キノン、アミン、メルカプタン、チオフェノール、芳香族ニトロ化合物、ハロゲン類、トリニトロベンゼンは最も強力な禁止剤の一つである。

(d) 溶剤: クロロプレンの重合は溶媒の存在で影響される。溶剤が、 $\mu$ -

polymerを強力に膨潤させるような場合、生成ポリマーは溶解したままである。クロロプレンの50%(容積%)だけ多く含む溶液の重合の場合、濃いJellyが生成する。溶媒がクロロプレンの10%だけの場合、高粘度溶液になる。一般に無色透明の溶液である。溶液中に含まれているpolymerは常態下で作られたところの $\mu$ -polymerと性質は少々異なっている。それは軟らかく、もしベンゼンが大層古いものでないなら、それに再溶解する。溶媒の存在は重合速度を可成り、減少させる。又稀薄溶液では濃い場合より重合が遅い。

又クロロブレンは非揮発性溶剤や不活性充填剤 etc の存在でも重合する。

(続)

Journ A. Chem Soc 53 4203-25 (1931)

Ind Eng Chem 26 30-33 (1934)

<前回の misprint 訂正>

Polymer and Polyfunctionality  $\longrightarrow$  Polymers  
 P.39 2行目 Difunctional  $\longrightarrow$  Bifunctional  
 8行目 最近の  $\longrightarrow$  最初の  
 P40 13行目 反応性度と重合官能性度間  $\longrightarrow$  重合度  
 P42 12行目 混入して  $\longrightarrow$  混入<sup>こみい</sup>って  
 下から8行目 反応<sup>が</sup>あろうと  $\longrightarrow$  反応<sup>で</sup>あろうと  
 下から3行目 しかる<sup>後</sup>に  $\longrightarrow$  しかる<sup>時</sup>は  
 P43 下から7行目 同類の基と反応  $\longrightarrow$  同類の基と

石

松の木かげに 石はのびる                      石はのびる  
 乾いた斜面に 石はのびる                      一年一年 苔をはやして

年若い人の 若い人の                      あゝ ここは墓場だ  
 血と息とを吸って

阿修羅

## 《研究室紹介》

### 町田研究室

町田研究室は、御大の町田先生の御人格並びに研究室のなごやかなムードを慕い集った面々より成り、毎年の卒論生が、モットーとして来た事は、学生生活の最後に於て、おゝらかに、自分の研究と社会勉強に取り組むことである。

当研究室の研修生及び卒論生は、町研の花壇の如く、円満にしてかどがなく、人間としてスケールが大きく、内容の豊富な、およそこれからの社会生活に於て、最も必要とされる対人関係に於ける誠実性に富み、日本の社会、若くは全世界のために、微力ながらも、何らかの貢献をなし、何らはじめる所のない生活を送ろうとする者の集りである。

しかし一たび研究にとり組めば、猛烈なファイトをとり組み、自分の納得のいかぬ事に対しては、とことんまで、つきつめねば、気のすまぬ有産の集りである。

先ず、樞成メンバーは、温厚篤実なる町田教授を筆頭に、現在、アメリカのパーデュウ大学に留学され、今秋帰朝される時、何か、当研究室に、もたらされる事を、研究室一同が、期待とある種の不安をもつて待ち望む所の内野助教授。昨秋結婚され、一段と落着きと物わかりの良さを増されて来た成田助手。飲んで良し、打つとよくバドミントン・暮、マージマン)話して良し、学生向の尊敬と人望の的、町田、稲野、西川、倉橋研修正より成る。町田さん、稲野さんは、近頃、二世教育に力を入れておられるのは、ほゝえましい限りである。

次に卒論生の顔ぶれと、研究室のテーマを紹介する。

市村 晃 ----- 無水マレイン酸とアクリル酸ブチルの共重合。

藤田清志 ----- スフ改善の為に架橋結合剤の合成。

西久保敏規 ---- メチロール化ポリアクリルアミドの合成とその利用。

齋藤哲雄 ----- アクリルアミドと無水マレイン酸の共重合について。

竹田敬司 ----- アクリルアミドとブチルアクリレート共重合によるテロマー合成。

川崎元夫 ----- ポリアクリルエチルの中級アルコールによるエステル交換

小原弘直-----合成繊維用蛍光染料の合成。

川端宗成-----アルデヒドデンプン合成。

木下三郎-----ヒドロキシエチルセルロースの合成。

さる二月末、新旧平論生の歓送迎会のビア・パーティーが、なごやかな勞  
働気のうちに終わった時、新旧平論生は、研修生を交え、互いに向つとけ合  
って、研究のひきつぎをするものや、テーブルをかこみ話に花を吹かせたり、  
その後最匠と手合せする者があり、本音になごやかなうちに会を終えた。

## 浜村研究室

明かるいみどりの目の光が窓から一杯さし込んでくる、そんな季節を二度  
迎えた今、とうとう研究室のことを我がもの顔に語ることになりました。

それじゃ、知っていること、知らないことまでお話ししましょう。

先ず浜研は繊維化学の自らの殿堂の中にはありません。少々うす汚れては  
いますが、ちょうど左前方に向い合ったコンクリート造りの冬暖かく、夏涼  
しい別荘一棟がそれです。木立らに囲まれた、屋上つきの素朴な、とよ言え  
ばよいのですが、どうみても長い年月に渡って酷使されてきた有様を物語って  
います。しかし、こんな建物の中でも、立派な研究がなされているのは日本  
のお国がらというものでしょう。

さて、今年のは研は、浜村先生が長年御研究を続けられている「蚕はなぜ  
桑の葉を食べるのか。」を究める仕事がいよいよその核心をつくに到り、教  
室全体が活気に溢れています。

これまでに、蚕は桑葉中に含まれる3つの *factors* に誘導されて摂食する  
ことが究められました。①の *factor* は *attractant* であり、これに導か  
れて蚕は食物上に達する。②の *factor* は *biting* であり、これに刺戟さ  
れて蚕は噛む行動を起す。即ち *attractants* が *Citral* 等の数種のテルペン  
類であること、及び、*biting factor* が  $\beta$ -sitosterol であることが明らか  
にされてきました。③の *factor*、即ち連続食下をおこさせる物質について  
は目下研究中にすぎません。このように蚕の食物選択に関しては、上記の3つ  
の *factors* が主になっており、味、栄養その他の物理的な条件は従であるこ  
とが明確にされたわけである。だから、更に一歩進んで、蚕を人工飼料で年  
中、大量に飼うことが可能になったのです。実際蚕は3つの *factor* を添加

された大豆を食んで食べます。従来、養蚕に関する研究は蚕や桑葉の品種改良の方面に限られ、季節的制限のある糸を離れて蚕を飼おうなどは、未だかつて誰も考えなかったのに、浜研が人工飼料で工業的規模で飼育できるようにこの研究に着眼したのは、大きな意義があると思います。養蚕界に画期的な変革をもたらすことは明らかでしょう。

この研究のスタッフは、浜村保次、林屋慶三、内藤謙一の諸先生で、京女大出身の松浦敬子嬢、一灯園の西川順君、及び今年一年化学を学ぶために来ておられる綾部高校の養蚕の先生、戸田浩氏がそれぞれ手伝っておられる。浜村先生は立派な体格にベレーのよく似合う温厚な感じ、「ドマー。」と書いて実験室をのぞきにまられる。もつとも、「ドマー。」と言われるまでに私達学生の方から、実験の経過を報告してくれると言われているのだが。林屋先生はがんばり屋、博士号をもらわれたのも当然といえる。浜研にピリッとした味を持たせている感じ。内藤先生は先輩が「気はやさしくて力持ち。」と評したとうりらしい。林屋・内藤の両先生は緞化の先輩です。

折しも今は蚕が育つ季節、即ち今までの成果を試すときです。その日その日の Data に一発一発されている姿は側で見ている気持ちのよいものです。

ところで私達C科の卒論生4人は

- 江岡賢治： OH基の入ったナイロンを作ろうと、グリセリンの両端のOHをCOOHにして、アミンと共重合させるべく頑張っている。
- 近藤孝一： 脂肪族ケテンの合成及びその重合
- 三辻 勝： ポーラログラフによる分析。目下のところ苅碱に馴れる練習が腕が上げれば、相宅研とタイアップして、ポリプロピレンの製造過程で含まれるTiの分析に利用するつもり。
- 佐藤京子： 絹層中のフラボン色素の化学構造決定、有機化学の基礎を身につけようと、これを迷んだ由。

といったぐあいに、色素の問題を除いては、教室の目的となっている仕事には全く関係のないことをやっています。しかし有機化学の大家ばかりの中で、この一年間学べば、きっと実力がつくことと張り切っています。私達はなによりも、この教室の研究意欲に燃えに活気と、落着きに憶れて席をおいたのです。

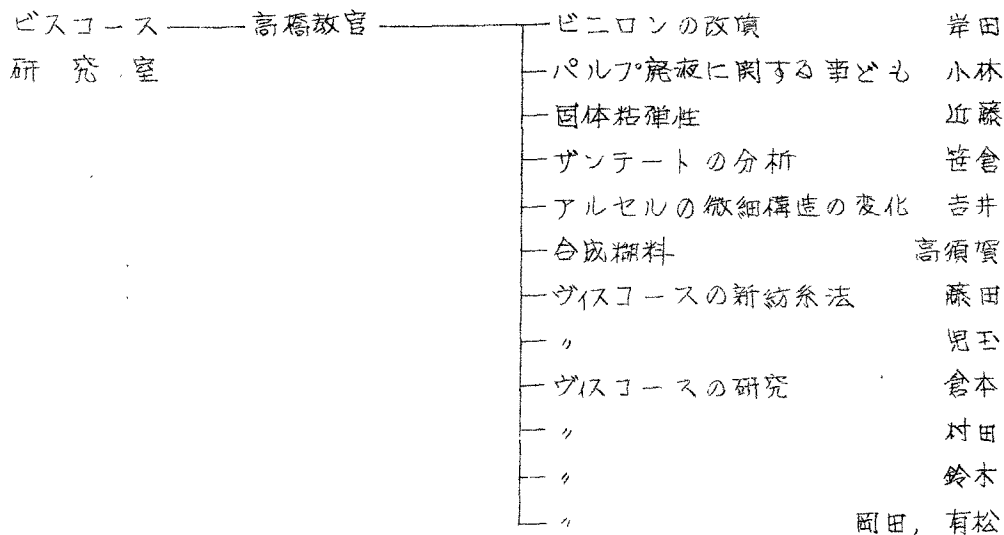
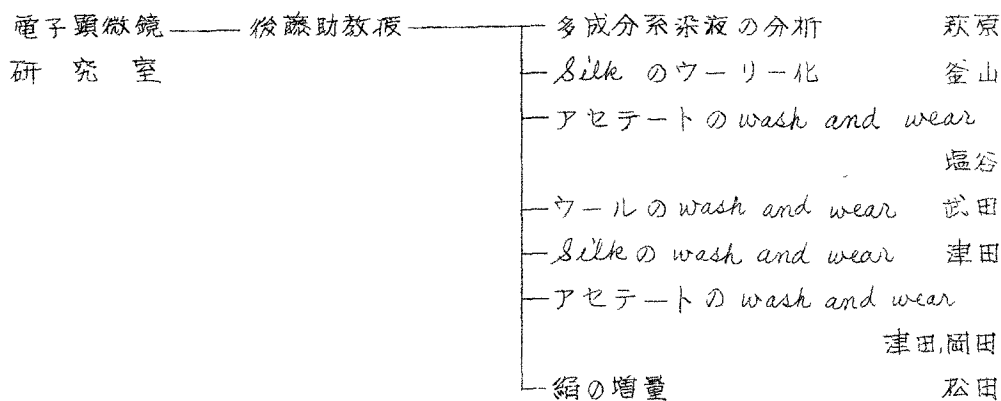
どうぞ気軽に遊びに来てください。おいしいお茶をおいれしましょう。

(佐藤)



# 岩崎研究室

当研究室は岩崎教授を筆頭にその陣容は多岐をさわり、総勢四十名近くに達する。今年もビスコースからアクリル積分重合、加水分解、洗濯についての研究及び最近問題になっている繊維の wash and wear 性、合成、無機化学、半導体、等々盛り沢山なテーマととつ組んで充実した成果をあげんとして意気盛んな卒論生、研修生、聴講生、等々で毎日活気あふれている。次にその member を紹介する。



御大岩崎  
工業化学  
桜田教授  
喜多教授  
にビスコ  
そのオー  
ものだそ  
岩崎教  
の疑問を  
両氏の学

化学工学——松本技官  
研究室

セルロース繊維の wash and wear	荒谷
— AN の乳化重合に於ける 積分反応	市原
— エクスランの wash and wear	真多
— 芒硝の苛性化	佐野
— アクリル樹脂のケン化反応 に於ける積分的解析	築山
— MMA の乳化重合に於ける 積分反応	上野
— テトロンの carrier による 洗濯の効果	内河
— 有機半導体の合成	山元
— 樹脂加工	齋
— ”	室本
— プリーツ	清水
— ”	斎藤
— ”	高屋
— 洗濯に関する研究	川崎
— ”	垂坂
— ”	長瀬
— 擬報の研究	山原

御大岩崎教授は日本におけるビスコース人絹の学問的基礎づけを行い京大の工業化学の基礎を築かれた喜多教授の門下でビニロンの発明者である京大の松田教授の二年先輩である。先年なくなられた神戸大学の中島正教授と共に喜多教授門下の三羽ガラスと唱えられた時代があった。喜多教授が提出されたビスコースに関する研究レポートは百数十報にのぼる長篇大作であったがそのオー報は現在東洋ゴム社長である富久カ松氏を加えて四人が手伝われたものだろうである。

岩崎教授は喜多教授のもとに居られる間にビスコースの組成について一つの疑問を持ちそれがきっかけとなってビスコースの発見者クローズ、ピバン両氏の学説を訂正するという輝やかなしい業績を収め、学位をとられた。

ビスコースはグルコース基一つにキサントゲン基一つの割合で結合した化合物であるクローズ、ビバン両氏の説に対して岩崎説は、グルコース基二つにキサントゲン基一の割合で結合したものと主張、以来、今日までの定説となっている。最近「積分反応」という新しい理論を打ち出され、この他に繊維の不燃性樹脂加工化学ビロード、スポンジなどと手がけられる研究は多い。

以上が、我が御大の輝かしき道の一部です。我々岩研生一同は、この輝やかしき業績にふさわしくあるべく、日夜、健闘している。

## 貴志研究室

繊維化学本館の二階の西北の一角、時たま実験室よりたびよいをる時奥にさそわれてか、これも初めの内だけだが一回生諸君が分析化学の実験時によく住い込まれる所である。

大部屋実験室は冬さむく、夏は西日がさして、お世辞にも居心地の良い所といえぬが、そこは良くしたもので、当教室には誰にも気兼ねせず、いつでも指導願える気安さがある。貴志教授、武内講師、竹田技官と、いずれも温厚な人ばかりで、これが当教室の気楽なふんいきを作り出している。

研究内容は *silk*, *wool* 等を素材として、そのアミノ酸量のいろいろな因子に関するものである。

地味で、取っつきが悪いが、やっているところでもない。卒業生は筆者とS科より三人、*fibroin*, *keratin* 等のアミノ酸量に関することである。研究室は講座回りの諸君とつっ込みであるから、せいぜい御利用の程を。雑誌会読読会は例年の如く町田研究室へ遠征している。因暮、将棋、その他我と思わんものは道具持参で休み時間にどうぞ。

(中村)

## 相宅研究室

最近の科学技術の進歩は全く驚くべき速さであるが、この技術革新の波に乗り遅れることなく、いやその波に乗って今や本邦随一の近代的設備を誇っているのが相宅研究室である。発足以来今年で4年目、相宅先生以下諸先輩の苦勞が今や実りつつあるところである。研究室の人員も研修生卒論生あわせて25名を越える大グループとなり増々活気がみなぎっている。

本研究室は「合成繊維研究室」の名が示すように、合成繊維全般はもちろん、合成樹脂全般、合繊用紡糸機の設計製作など広く「応用高分子」の研究に取り組み、着々と成果を挙げつつある。例をあげると、ナイロンに関する研究は現在其社において工業化されつつあり、本研究室設計の紡糸機は各社に設置され、工業化の段階にあり、京都府立釜山高校には同じくアクリル繊維紡糸の中間試験工場を設けた。また、従来困難とされていた夢の織組といわれるポリプロピレン繊維の染色は、本研究室において今や完全に染色に成功し、工業化も尙近い。この他、佐々木研修生らが本研究室で製造したナイロン、ポリエチレンなどの合成繊維ロープは現在北洋漁場で佐々木氏自らが船に乗り込み、試験をされており、その結果は好評を博しているとのことである。以上はほんの数例にすぎず、これから完成されようとする研究も多い。

このあたりでまず本研究室を構成する人々とその主なる研究テーマを大体部屋別にご紹介しよう。

### 〔北西角内側の部屋〕

相宅助教	「各種合成樹脂、合成繊維の研究」
五十嵐研修生	「ポリプロピレン、ポリエチレン繊維の染色」
松井	「ポリ塩化ビニルペーストレジンの研究」
瀧辺	「ポリプロピレンの塗料化」
佐々木	「各種合成繊維ロープの研究」
坂口	「プラスチックの応用に関する研究」
山崎	「各種合成繊維の染色に関する研究」
俣木研究生	「ガス吸収触媒の研究」
柏木卒論生	「ポリプロピレンの球晶に関する研究」
名取卒論生	「合成蛋白(ポリアミド)に関する研究」

- 山名平論生 「ポリプロピレン、ポリエチレン繊維の染色」  
 三宅 〃 「ポリプロピレン、ポリエチレン繊維の染色」  
 [北西角外側の部屋]  
 山脇研修生 「各種アクリル酸エステル重合」  
 芥生 〃 「各種モノマーの共重合」  
 西垣 〃 「不織布の合成樹脂接着剤の研究」  
 山田 〃 「ポリエチレン・ポリプロピレンの紡糸」  
 岡崎平論生 「アクリロニトリルの放射線重合紡糸、耐熱性の研究」  
 早川 〃 「アイソタクチックポリマーに関する研究」  
 宮内 〃 「各種モノマーの共重合」  
 海野 〃 「ヘンケル法によるテレフタル酸の合成」  
 木田 〃 「ポリエチレングライコールの応用に関する研究」

[工場]

- 北尾助手 「各種合成繊維製造の工業化と各種合成樹脂の物性」  
 高木研修生 「各種合成繊維製造の工業化と各種合成樹脂の粘度に関する研究」  
 木村 〃 「ポリプロピレン繊維の延伸、熱処理に関する研究」  
 富岡平論生 「ポリエチレン、ポリプロピレンの紡糸」  
 荒瀬 〃 「ポリウレタン その他の合成スポンジの研究」  
 片山 〃 「ポリエチレン、ポリプロピレンの紡糸」

以上が今各人が行いつつある研究だが、何しろ本研究室はそれぞれ時代の先端を行くテーマを研究しているので、まだまだ行わなければならぬ事が数多くあり全く忙しい。それで平論生も原則として一人二題を一年の間に仕上げる予定である。まに時間が余っている時は他の人の研究も手伝って、先生以下研修生、平論生が一丸となって次々と新製品、新技術を産み生じていくところが本研究室の特色であり、また強味でもある。従って平論生はもの先に述べたテーマによつては全部とまて行かなくとも、出来るだけ多くの事をこの一年間に学ぶように心がけている。研修生の方々は以上の方々の他にも非常勤ともいべき人々が居られ、その人数も増えつつあり、その他研修生の雇する会社はもちろんのこと、先生は会社関係に相当額が広いので種々の会社や研究室などが、試料や文献の提供や分析の引受け、機械の貸与などの形で本研究室に協力してくれている。

先にも少し述べたが工場には数々の新しい機械が設置されたので、いよいよ今年度からポリエチレン、ポリプロピレン繊維の製造が本格的に行われる。

本研究室は、先生がホリエチレン、ポリプロピレンに大へんお詳しいのを初め、紡糸や染色の技術の優秀な研修生が数多く居られるので、特にこの二繊維に関しては合成繊維研究室の名に恥じず、原料の重合から紡糸、染色まで全部一貫した研究が行われ、本研究室が大いに誇りとし、また自信を持っている研究である。もちろん紡糸機も本研究室設計のものである。この様なことは日本では珍しいこととして各会社、研究所、大学などが現在注目しつつあるところのものである。亦、本研究室が中心となる“ポリプロピレン研究会”が存在し、この会には大阪工業試験所、京大化学研究所の有志、武庫川女子大、その他会社が数社加入している。

どうも自慢話の様になったが、以上の事は現在実際に行われていることであり、決してうそではない。実際に行っているものほど強いものはないのであってこの「実行」一即ち机上のプランに終らずそれを実際に行うということが相宅研のモットーの一つでもある。そしてこの実行されているものが現代の社会の情勢にあったものでなければならぬ。こういう考えのもとに先述のような研究が行われているのである。

さて今度は本研究室を構成する人々について述べよう。相宅研に集まる研修生や卒論生には、いわゆるガリガリ勉強屋の青ひょうたんというようなケチな野郎は居ない。全員勉強もやる時にはすごくやるが、また運動もするし適当に遊びもする。のびのびとした明るい性質の元氣旺盛な若い人々ばかりである。だから本研究室にはいってもはつらつとした健康なムードがある。先生はいろんなスポーツがお得意だし、研修生、卒論生にもスポーツマンが多いので、先生以下全員がスポーツにハイキングにと楽しい毎日を過せるような計画が、沢山考えられている。

本研究室は先生と研修生、卒論生が皆同じ部屋に居るので、この三者の間には何のへだたりもなく、先生も僕達学生 of 気持ちを充分理解されているので、先生、研修生、卒論生の間は非常に親密であることは、これまた本研究室の特色である。全員がアミダに雑談に遠慮のない話を交わしあう。研修生の方々はそれぞれ話題の豊富な方々ばかりなのでいろんな事が話題になるが、研究に関することも多い。毎週一回行われる雑談会の時はもちろんだが、アミダ中にも活発な討論が行われ、こういう雑談中から大きな成果を産み出すアイデアが時として出てくるのである。このダベるということのうちから僕達未熟な卒論生はいろんなことを学びとるのである。こういう時にももちろん研究室全体が至極なごやかな雰囲気につつまれていることはいうまでもない。このダベリの楽しさは各研究室共通のものだろうが、本研究室はあらゆる方

面のことを経験されている人々の集りであるから実に愉快である。

まだまだ書くべき事柄も多いことと思われるが、僕も本研究室に来てまだ一ヶ月余りだから、内容も以上くらいしか判らない。が目下のところ僕個人としては非常に楽しい研究室生活を送っているし、他の学生も同じ気分のようにある。

皆さんも御存知の通り、最近の科学技術の進歩する度合は全く想像を絶するものがある。現今の一年は過去の十年以上に匹敵する。苦勞して完成した発明は、発明した時にはもう他の新しいものが、それを追いつこうとしている時代である。新しく複雑なものはどほろがるのも早い。昔と同じ調子でいたり、ボヤッとしているものはもう世の中から取り残されるのである。古いものにノスタルジアを感じている時ではない。明日の世界がどんな形になるかは我々がどんな動きをするかによつて非常に大きく変わるであろう。本研究室は現在のところ幸にして時代にマッチした事柄を研究しているから毎日先生には各方面からの来客が絶えない。このため先生は御自分の御研究ができないほどでんてこまいをされている。この忙しいということも本研究室の特色かも知れぬが、これとて少しでも油断をするともう世間から取り残されてしまう。このような目をみはる技術革新の波の先端にあつて、本誌一に止まらず、日本一、世界一の研究室を目指して、常に新しいものと取組んで日夜全員が研究に励んでいるのが、合成繊維研究室こと「相模研究室」なのである。

(後記)

どういふ因果か僕に本研究室紹介の原稿を書くお鉢がまわってきたので、あつかましくも浅学を省りみず書いて見た。しかし勉強不足や、研究室に関する知識の不足、それに拙文のために判り難い所が多くあると思う。それで御不審な点があれば直接研究室の方へ御遠慮なく来て頂きたい。またその他のお言葉もいつでもどしどし御遠慮なく御来室下さい。

(山名)

編集部	4 回生	荒瀬治夫	2 回生	有松利雄
	〃	荒谷善夫	〃	金井政洋
	〃	早川和彦	〃	福本 勲
	3 回生	木下泰忠	〃	堀江 広
	〃	沢野敏実	1 回生	井上隆之
			〃	川村了一

本号の表紙 4 回生 片山好彦

# 編集後記

野球と言えば、7回はラッキーな回だと言われるが、我々のCHAINも7回の発行を重ね、このあたりで、一つクリーンヒットでも放とつと、編集部一同はりきっていたが、本ら、こゝに見る様な見事なヤク号を発行出来ることになりました。今までは、うって変つて、原稿が多く集まり、一度に2冊分も合せを充実したものが出来ました。我々は元来、機関誌と言うものは、特定の方向づけのなさるべきものではないと考えている。従つて、すべての原稿を載せることをモットーとしている。かくして、この様な大部なものとなつた次第である。今回は初めての試みとして学長会見を行ったが、この試みに、大変、ご協力下さった畑宅先生に深く感謝致します。なお次号の前頁の編集委員を募集しますから、どしどし寄せ下さい。

## Chain No.7

発行日	1961年6月15日
発行所	京都工芸繊維大学繊維化学科学生
印刷	北斗プリント社 Tel(7) 0231
編集	繊維化学科学生Chain編集部
編集代表	荒谷善夫